
空に想いを...

洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に想いを…

【Nコード】

N3357S

【作者名】

洋

【あらすじ】

幼少の頃に両親を亡くした海は、親族中をたらい回しにされ、虐待され、心に大きな傷を負う。

親族の手から引き離され、児童養護施設に引き取られた海だが、その時既に、彼は生きることが、自分の人生を諦めてしまっていた。

そんな彼の前に、ある日一組の若夫婦が現れる。

彼らの養子になり、少しずつ「無償の愛」を知っていく海。

だが、海は過去の出来事から、簡単には彼らを信じる事が出来ず^ずにいた……。

生きるということ。愛するということ。

海はそれを学びながら、一步一步、大人へと変わっていく……。

周りを緑に囲まれた、小さい山の一角に位置する三階建ての白い小さな建物。

みどり児童養護施設と記され、初夏の花々に彩られた門をくぐり、駐車場に一台の車が静かに停まる。

高級車レクサスから出てきたのは若い夫婦。

おそらく二十代であろう彼らは、後部席から大きい袋をいくつも取り出し、それらを持ち施設の正面玄関へと向かう。

「近藤さん！」

夫妻が玄関まで半ばまでの距離を歩いた時、そこから一人の女が彼らの名を呼び、飛び出してきた。

初老に差しかかった彼女は、年齢を感じさせる速度で夫妻に走り寄り、弾んだ息を整えることもせず、彼らへ笑顔で話しかける。

「お待ちしていました！いつもありがとうございます」

「気にしないで下さい院長先生。僕達が好きでしていることですか
ら」

院長の言葉に男、近藤輝こんどう あきひは笑顔で言う。

「そうですよ。先生。私達は子供が好きなだけですから」

輝に続き言ったのは、彼の妻である雫だ。

二人の笑顔に打算的なものは一切なく、彼らの言葉に裏がないことを証明していた。

院長は言う。

「ふふふ。お二人はお若いのに、本当に素晴らしい人ですね。お二人の間にお子さんが生まれたら、その子はとてもお幸せでしょうね」
「……そうだと、いいんですけどね」

院長の言葉に彼らは小さく笑った。

それは儂い笑顔。

院長は詳しくは知らないのだ。彼ら二人のことを。二人の『悲しみ』を。

「……先生。子供達が楽しみにしているでしょうから、会いに行ってもよろしいですか？」

「あら私つたらしいません！ええ、どうぞどうぞ！」

院長は慌ててそう言つと、輝達が持っていた荷物をひったくるようにして取り、笑顔で彼らを施設内へと招いた。

強引ではあるが、彼女には悪気は一切ない。そういう性格なのだ。最初こそ面食らった輝達であつたが、今では裏表のない彼女の性格をいたく気に入っていた。

……しかし、そんな彼女にも言えないことがある。二人が孤児を、子供を大切に思う気持ちの根源を。

輝は心配げに雫に視線を向け、雫は小さく「大丈夫」と頷いた。

「みんなー！近藤さんが来てくれたわよー！」

院長の言葉に、思い思いの行動をしていた子供達が「わー」と声をあげ院長に群がる。

幼少の子供達の目当ては、夫妻よりも夫妻が持ってきた袋一杯の玩具や衣服だ。

これは僕のだー、とあがつた声に周りからずるーいと重なる非難。それを見た他の先生が「喧嘩しないの！」と叱る様子を、夫妻はほほえましそうに見つめていた。

と、その時。

（——っ！？）

輝は突然、寒気を感じた。

寒気を感じた方に顔を向けると、そこにいたのは一人の少年。

小学低学年と思われるその少年は、少々線は細いが、一見普通の
子供に見える。

しかし――

（なんて目だ……）

輝はその少年の目を見て、息をのんだ。

見ているだけで寒気を覚えるような冷たく、鋭い目。少年が輝を
睨むその目は、彼のような年代の少年がしていいものでは、決して
なかった。

「輝さん……」

輝と同じように少年の視線に気づいた雫が、少年に視線を向けた
まま輝の腕に触れる。

雫が戸惑っているのを、輝は感じた。

二人の視線を受け、少年は彼らに向かい歩き出す。

冷たい瞳の少年。しかし、同時にとても美しい少年であることを、
彼が近づいてくるにつれ、輝達は知った。

その美しい少年は、輝達の前で歩みを止め、彼らを見上げながら
口を開く。

「満足か？」

少年の口から発せられる子供らしい幼い声。しかしその内容は全
く子供らしくなかった。

「弱いものに施しをして強者ぶって。そうやって自分は特別だと悦
びに浸って、さぞかし満足だろうな」

「き、君……」

「偽善者が」

輝の呟きを無視し、少年はそう吐き捨て彼らを睨む。

そんな少年の行動に気づいた院長が、慌てて声をあげる。

「こ、こら！海君！なにしてるの！？」

院長の声に少年は彼女の方をちらりと見やり、ふん、と鼻を鳴ら
し去って行った。

「ごめんなさい近藤さん……。あの子が失礼を……」

頭を下げる院長。そんな彼女に雫は問う。

「あの、先生。あの子は……？」

輝と雫は、この児童養護施設に定期的に寄付をしている。前回ここに来たのは二ヶ月前。その時、あの少年はまだいなかった。

院長は言う。

「はい。二週間前にこの施設で引き取った子で、名前は海君^{かい}。七歳の小学二年生です」

「七歳……」

二人は驚きを隠せなかった。七歳といえばまだまだ幼子。物事の善し悪しはもちろん、あのような辛辣な言葉を理解出来る年齢ではない。

それに……。

「院長先生。彼は、その……なにか心に傷を負っているのですか？
そうでなければ、あんな目が出るわけがない」

輝の言葉に院長は俯く。言つべきか、言わざるべきか、それを悩んでいるのだ。

「……実は」

数秒の逡巡ののち、彼女は語り出した。彼らになら話してもいいと思ったからだ。

「彼の両親は、彼が二歳の時に他界しているんです。彼の祖父母方も皆さんすでに亡くなられていて……。それで親戚に引き取られたらしいんですが……」

「……虐待、ですか？」

雫の言葉に院長は頷く。

「言葉と力による両方の暴力を受け続けたあげくに、他の親戚に預けられて。でもそこでも虐待を受けて。そうやって親戚中をたらい回しにされたそうです。小学校の彼の担任の先生が虐待の可能性に気づき児童相談所に連絡して、その結果ここで引き取ることになったんですけど……」

「……その時にはもう、あんな目をしていた、と」
「……はい」

輝は納得した。少年、海があんな目をしている理由も、彼があんな言葉を知っている理由も。

彼は受け続けてきたのだ。理不尽な暴力を。
彼は言われ続けてきたのだ。心ない言葉を。

そうやって覚えてしまったのだ。辛辣な言葉を。
そうやって信じられなくなってしまったのだ。大人を。他人を。

輝も雫も、共にそれなりに裕福な家庭で愛されて育った。
だから海の胸中など、想像することも出来ない。人は体験したこ
としか理解出来ないのだから。

しかし、彼らは二人共思う。幼い子供に、あんな目をさせていて
はいけない、と。

（この世界には悲しみと絶望しかないなどと、子供に思わせていい
わけがない！）

輝はそう、強く思った。

輝と雫はどちらからともなく見つめ合い、そして同時に頷く。そ
のまま院長に顔を向け、輝は口を開いた。

「院長先生。ご迷惑でなければ、彼を、海君を、私達で引き取りたい
のですが」

「え！？海君を、ですか？」

驚きの声をあげる院長。彼女に雫は優しい微笑みを向ける。

「私達は彼に優しさと幸せを教えてあげたいんです。今の世界には、確かに、悲しさや絶望が多く渦巻いています。けど、それだけじゃない。優しさと幸せが存在することを、彼に教えてあげたいんです」
「……」

院長は躊躇った。輝達の人となりは充分理解しているつもりだし、海も、ここにいるよりも有意義な生活を過ごせることは間違いない。

しかし、それでもあつさりと頷くことは出来ない。彼らの幸せを、児童養護施設の院長として考えれば。

「……近藤さんの提案は素晴らしいものだと思います。でも、本当にそれでよろしいのですか？例えば……あなたの方の間にお子様が生まれたとしても、海君のことを息子として見られますか？」

養子として引き取られ可愛がられた子供が、夫婦の間に実の子供が生まれた瞬間から邪魔物扱いされることは、実はよくあることだ。それゆえに、こういった事態に関して、院長としては慎重にならざるを得ないのは当然といえた。

院長の言葉に輝と雫は顔を静かに見合わせる。

院長の言葉にはつとめたからではない。

これは確認だ。彼ら夫婦の間にある『秘密』に関する確認。

大丈夫か、という輝の視線に、雫は静かに頷いた。

そうして雫は院長に顔を向け、口を開く。

「……先生。私達の間には、子供が出来ることはないんです。私、子供が出来る体じゃなくなっちゃったんです」
「——っ！」

院長は鋭く息を飲む。

それはそうだ。誰が想像出来るだろう。若く幸せそうな夫婦の間に子供が出来ないなどと。

驚き口を開いている院長に、雫は言う。

「だから、先生のご心配は杞憂です。海君が私達の息子になってくれたら、私達は心から彼を愛します。一人の家族として接します。彼に、辛い思いも悲しい思いもさせません。どうか、私達を信じてください」
「……」

雫の言葉に院長は逡巡し、そしてゆっくりと頷いたのだ。

海を養子にする手続きは、意外にもスムーズに行われた。

『意外』というのは他でもない。海が輝達の息子になることにあっさりと同意したのだ。

基本的に養子縁組というのは本人の了承が必要となる。十五歳未満の場合は法的代理人（この場合は院長）が許可するだけでも法的には問題ないのだが、輝達はそうはしなかった。

大人の都合で彼の人生をこれ以上振り回したくなかったのだ。

だから彼らは本人に「僕達の息子にならないか」と尋ねたのだ。それに対して海は「いいぜ」とあっさり頷き。

心に傷を負った海はもつと難色を示すと輝達は思っていたため、驚いた。

あまりにあっさりしていたため、輝は海に聞いた。そんなに簡単に決めてしまっているのかと。

「俺は自分の人生に期待していない。ただ生きて死ぬだけだ。だったらどこに行こうと、誰が親になろうと関係ない」

そんな海の言葉に輝は悲しくなった。彼の心の闇が予想以上に深いことを知ったからではない。彼のような少年が、未来を夢見ない、

夢見ることを諦めてしまったが、とても悲しかったからだ。

（絶対彼に笑顔を取り戻させて見せる！）

そう、輝は心に誓った。

海が同意してからの行動はとても迅速だった。家庭裁判所に許可を求め、戸籍法に定めてある通り戸籍を届出し。

仕事の合間を縫ったとは思えない早さで、海は法的に『近藤海』となった。

海と輝達が出会って、わずか一ヶ月のことだった。

「近藤さん。海君をよろしく願います」

海が近藤家に養子になることになった当日、みどり児童養護施設の正面玄関前には院長が海の見送りに出て来ていた。

他の施設は定かではないが、このみどり児童養護施設において、子供の巣立ちには施設内の教職員全員で見送ることになっている。

……しかし、今日に限っては院長一人しか見送りに出て来ていな

かった。

理由は、海にある。

彼がこの施設に来て日が浅いから、ではない。彼が拒んだのだ。

「俺はお前達になんの感謝もしていない。恩も感じていない。見送られるだけ迷惑だ」そう言って、彼は前日の送別会にも参加しなかったのだ。

そういった理由で、院長以外の教職員は見送りに出て来ていないのだ。

「はい。必ず彼を幸せにしてみせます」

院長の言葉に、輝は力強く、雫は優しく頷いた。

そんな二人の笑顔を見て、院長は頷いた。そして雫の隣にいる海（本人はさっさと車に乗りたがっていたのだが、雫が彼の手を握って離さなかったため、不満そうにそっぽを向いていた）の前にしゃがみ、彼と視線を合わせながら言う。

「海君も、元気でね」

その院長の言葉に対し、海は皮肉な笑顔を浮かべる。

「それはこいつら次第じゃないのか？ 案外すぐここに戻ってくることになるかもな」

彼の言葉に院長が悲しそうな表情を浮かべるよりも早く、雫が海の頭を軽く叩いた。

彼女の行動に、海も院長も驚いた色が顔に浮かぶ。

雫は海の前にしゃがみ込み、彼に向け優しい微笑みを携え言う。

「海。 そんなこと言わないの。 私達はあなたを手放したりなんかしないわ」

雫の言葉に、海の瞳が揺らいだ。 が、それも一瞬のことで、すぐにシニカルな笑みを浮かべる。

「もう母親面か？ ずいぶんと図々しいんだな」

「海君……」

皮肉たっぷりの海言葉に、顔をしかめたのは院長だけだった。 当の本人はニコニコと先ほどよりもいい笑顔を浮かべている。

「輝さん！ 海が『母親』って言うてくれたわ！」

「……は？」

予想していなかった雫の反応に、海は間抜けな声をあげた。

「あー！ずるいじゃないか海！僕のこと『父さん』と呼んでおくれ！」

「な……なにを……」

急にしゃがみ近づいてきた輝に、海は後ずさりを始める。じりじりと後退する海に合わせて、いい笑顔を浮かべながら輝も彼に近づく。

「『パパ』でもいいよ！さあ！呼んでごらん！My Son！」

「まい、さん……？」

「おっと、英語はわからないか。息子という意味だよ。海」

輝のその言葉に、海の瞳が再度揺らいだ。上下左右にさ迷い、涙が浮かんで。

しかし、そんな表情を誰にも見せないように、海は体ごと後ろを向き慌てて目元を拭った。

「はっ！なにが息子だ！みんな人前ではそう言っただよ！自分達はこの子供を引き取って育てています、って社会的尊敬を得たいだけにな！お前達もそいつらと一緒になんだ！俺はもう騙されない！」

「海。私達はそんなことしないわ。私達は……」
「信じられるか！」

雫の言葉を遮り、海は耳を塞ぎ車の後部席へと飛び込んだ。

そんな海を見て輝は思った。

海は本当は愛情というものに飢えているのだと。

それはそうだろう。まだ七歳。本来ならまだまだ親に甘えたい年頃だ。

彼に罪はないのに、引き取られる先々で幼い心と体をなじられて

そうやって全てに絶望した海だが、心の奥底では愛情に飢えていると、輝と雫は今の一連の流れから見抜いていた。

（満たしてあげよう。僕達が海の心を）

輝と雫はそう心に誓いながら、院長への挨拶を済ませた。

「ねえ、海。昼ご飯、なにを食べたい？」
「……え？」

輝の運転するレクサスの後部席。ぼーっと、流れる風景を見ていた海に声がかけられた。
隣に座った雫からの言葉。その言葉を、海は理解することが出来なかった。

いや、『なに』を問われているのかはわかる。
わからないのは『なぜ』問われているのか、だ。

目を丸くして凝視してくる海に、雫は優しく笑いかけた。

「海はなにが好き？ハンバーグ？カレー？オムライス？」

あれこれと料理名をあげていく雫を、海は不思議なものを見るような眼差しで見っていた。

（なんなんだこいつは？なんで俺にこんなことを聞いてくるんだ？）

輝達が海を引き取りたいと彼に言った時、海は特になんとも感じなかった。せいぜい、ああ、またか。と思っただくらいだ。

だから特になにも考えずに彼らの養子となることを認めた。どこにしようと自分の境遇は変わらないと思っただから。

しかし、今回は様々なことにおいて彼の予想を裏切った。

今まで名前で呼ばれたことなんてないし、笑顔を向けられたことも意見を求められたこともなかった。

敵意には耐性のある海だが、好意に対しての耐性は、全くといっていいほどない。

だから戸惑う。輝と雫の行動に。

海は顔の位置はそのまま、視線を雫から逸らし答える。

「……そんなの、お前らが決めればいいだろ」

海にとって食事というのは、食べられればいいものだっただ。

引き取った家の人が食べ終わったあまりものが彼にとっての主な食料であり、時には水だけしか飲めないこともあった。あまりの空腹に、真夜中冷蔵庫をあさったことすらある。

そんな彼に好物などあるわけもなく、求められても困るのだ。

雫は言う。

「駄目よ。今日は海が家族になった記念日なんだから、海の好きなものを食べるの」

「……」

意味がわからなかった。

確かに海は戸籍上は雫達の息子に、家族になった。

しかし、海はそれを建前だと思っている。自分はいくまで、彼らに同情と尊敬を向けさせるための道具、というのが海の認識だった。

それなのに雫は、周りに人がいないのに、自分達の評判が上がるわけではないのに、海に、海だけに笑顔と好意を向けてくる。

今まで体験したことのないものに、海はとても戸惑った。

目を見開き、口を開け固まる海の鼻を、雫はつまむ。

「なにがいい？好きなものと言っていいのよ」

向けられる優しい眼差しと、まるで本物の親子のようなやり取りに、海の瞳に涙が浮かぶ。

それを雫に見せたくなくて。
そんな自分を認めたくなくて。

海は雫の手を振り払い、顔を背ける。

「だから……！お前が決めればいいだろ！？俺は……」
「だーめ。今日はとても大切な記念日なの。これだけは譲れないわ」
「——っ！」

頭を撫でながらの雫の言葉に、海の瞳にさらに涙がにじんだ。

なぜ自分はこんな好意を向けられているのか、なぜこんなに優しくされているのか、海は全く理解出来ない。

こんなことをしても雫達にはなんのメリットもないのに。ただ負担が増えるだけなのに。

なんで彼らはこんなにも他人の（戸籍上では既に家族だが）自分に優しくしてくれるのか。海は全く理解出来なかった。

頭を撫でられながら、瞳に涙を溜めながら、流れる風景を黙って見つめる海。

止まってしまった会話に、今まで口を挟まなかった輝が口を開く。

「雫。今日の昼食はデパートにしないか？あそこならいろいろな飲食店が入っているし、メニューを見ながらの方が海も決めやすいだ

る？」

「あら、それはいい考えね。デパートなら海用の食器や服も買えるし、一石二鳥ね」

楽しそうに会話をする二人を横目に、海は不思議な気持ちを感じていた。

今まで彼を引き取ってきた大人達とは全く違う反応を見せる二人。なんのメリットもないのに自分を本当の子供のように扱う二人。

優しい二人。温かい二人。

海は泣きたくなった。

今すぐ彼らの胸に飛び込み、声をあげ泣きたかった。

この二人なら、自分のことを受け入れてくれるんじゃないか、と、そこまで考えて海は自分のその考えを恥じた。

（馬鹿か俺は！大人なんてみんな汚い存在なんだ。今まで見てきた大人はみんなそうだった。騙されるな！心を許すな！こいつらも今だけなんだ！）

改めて海はそう自身に戒め、再び流れる風景に意識を向ける。

そんな風に心を閉ざす海を、
雲は悲しそうに、
しかし瞳には強い
意志を浮かべ見つめていた。

デパートのレストラン街を、輝と雫は両側から海の手を繋ぎ歩いていた。

間に挟まれた海は居心地悪そうにしていたが、不機嫌な顔とは対照的に、瞳は好奇心で輝いていた。

海はデパートに来るのは初めてだったのだ。

和洋中、無国籍に並ぶ店舗。ガラスケースの中に整列する見本の料理達。店内から泳いでくる食欲をそそる匂い。休日の昼時ということもあり、海達と同じようになにを食べようかとさ迷う人々。店内に入る順番待ちをしている人々。

そういった些細なこと全てに興味を引かれ、先ほどから海の首はあちこちを行ったり来たりしていた。

そんな海の様子を見ていた輝が、笑いながら言う。

「海はデパートに来るのは初めてかい？」

輝の言葉で自分が浮かれているのに気づいた海は、はっとし、表情をより不機嫌なものへと変えた。先ほどまで瞳に浮かんでいた光

はすっかり消えてしまった。

「……そんなこと、どうでもいいだろ」

「どうでもよくないさ。もし初めてなら、今日は初デパート記念日でもあるのだからね！」

海は不機嫌な表情を作るのも忘れ、輝を見上げた。輝の言葉に感動したからではない。呆れたからだ。

（こいつ、アホなのか……？）

本人が聞いたなら傷つくであろう言葉を言わなかったのは、海の優しさではない。

呆れてものが言えなかったただけだ。

そんな海の胸中を悟った雫（実は彼女も呆れていたりする）が、苦笑いを浮かべながら輝に言う。

「輝さん。海が呆れていますよ。なんでもかんでも記念日にすればいいってものじゃありません」

「い、いや、しかし……」

「困った父さんね、海。それで、海はデパートは初めてなの？」

「……流された……」

立ち止まり、悲しそうな表情の輝。

しゃがみ、海の目線に合わせながら微笑む雫。

二人の力関係をなんとなく理解しながら、海は視線を雫から外し答える。

「……だから、そんなことどうでもいい……」

「駄目よ。私達は今日から親子で家族なの。私達はあなたのことをなんでも知りたいのよ」

「……っ」

海は下唇をぎゅっと思い切り噛んだ。そうしないと涙が流れてしまいそうだったから。

海の人生で今日まで自分のことを知りたいと言ってくれた人は、誰一人いなかった。

誰もきちんと自分を見てはくれなかった。誰も自分を知らうとしくれなかった。

自分の境遇に、人生に絶望した海であったが、それでも心のどこかでは求めていた。

自分を見てくれる人を。 自分を知りたいと言ってくれる人を。

——自分を、求めてくれる人を。

……しかし、海の過ごしてきた日々は辛すぎた。そして、長すぎ

た。

幼い少年の心を傷つけ、人を簡単に信じられなくさせるくらいに。

（信じるな。心を許すな。そうすれば……もう傷つかずに済む……！）

海は涙を無理矢理抑え、雫が離れた方の手を思い切り強く握り締めた。

七歳の少年とは思えないような鋭い目つきで雫を睨み、言う。

「ああ、初めてだよ！デパートどころかまともに外出だつてしたことがないさ！これで満足か！？」

海のあげた声に、周囲の視線が彼らに集まる。

かつて海を引き取っていた人達は、海がこうして人前で声をあげると、決まって彼を人気のない所まで連れて行き、彼のことを殴った。

最初は痛みに泣いていた海であつたが、いつのころからか泣かなくなつた。黙ることが一番被害が少ないことに気づいたからだ。

今回海はわざと声をあげた。怖かつたからだ。自分の知らない感情を向けられるのが。

彼らなら、と期待してしまう自分が。

だから声をあげた。そうすることによって、慣れしたしんだ感情を向けさせようとしたのだ。

しかし……。

「そうなのね。じゃあ、これから一緒にいろいろな所に出かけましょう」

「……え？」

向けられたのは、彼が期待した反応ではなかった。

海の頭を撫でながら、変わらず優しい微笑みを浮かべている雫。

「そうねえ。確か来週の日曜日は仕事が休みだったはずだから、みんなで遊園地に行きましょう！」

顔の前で両手を合わせ、少女のように雫は言った。

「それはいい考えだ！海！一緒にジェットコースターに乗ろう！」

雫の考えに同意し、楽しそうな笑顔を浮かべる輝。

「じゃあ私は海と一緒にメリーゴーランドに乗るわ。ふふ、楽しみね」

二人から向けられる優しい笑顔。優しい瞳。

全ての予想をことごとく裏切る輝達に、海はどうしたらいいかわからなくなった。

「でもまずはご飯を食べましょう。海、なにがいい？」

対応に困った海は、流されることにした。これも、彼がこれまでの人生で学んだ、自己防衛の一つだ。

自分に向けられた言葉に、海は俯いたまま「……あれ」と小さい声で指差す。

輝と雫がその指の先を追うと、そこには数種類のハンバーグがシヨーケースに並んでいた。

「ハンバーグね。じゃあ今日の昼ご飯はハンバーグにしましょう」
「……ハンバーグ」

雫に続く形で海が呟く。その反応で輝と雫は悟った。海は『ハンバーグ』という名称も知らなかったのだと。

これからは海にいろいろなものを海に教えてあげよう。いろいろなものを食べさせてあげよう。

輝と雫は、そう心に誓った。

「美味しいわよ。さあ、海。行きましょう」

差し出された雫の手を、海は逡巡ののち、ゆっくりと握った。

そんな海を、雫達は優しく、見つめていた。

板張りの床の上に等間隔で並べられた木のテーブル。それに対する木の椅子や赤いソファー。

昼時ということもあり、店内は満席で、従業員達は忙しそうに走り回っている。

そんな店のあるテーブルで海達は食事をしていた。

熱せられた鉄のプレートの上で、音を立てて歌うハンバーグ。セツトになっているライスとスープを、海は両手で囲いながら、むさぼるように食べていた。

ガツガツと勢いよく食べているくせに、意識だけは周りを警戒している。

その食べる姿を見て、輝達は野生の猫のようだと思った。

「海。そんなに慌てて食べなくても誰も取りはしないよ」

苦笑いを浮かべながらそう言った輝。

しかし海は警戒することをやめず、それどころか輝を睨みつけた。

（この子は、落ち着いて食事をすることも出来なかったんだな……）

輝は想像することしか出来ない。ここまで警戒しないと食事が出来ない環境というのは、いったいどういうものなのだろう。

『普通』という定義は人それぞれによって違う。

お金持ちの家に生まれた人にとってみれば、お金があるのが、欲しいものを好きなだけ買えるのが『普通』だし、貧乏な家に生まれた人にとってみれば、お金がないのが、欲しいものを我慢しなくてはいけないのが『普通』だ。

『普通』の定義は平等ではないし、国によっても異なる。

衣食住において全てを平等にすることなど、神でさえ、出来ない。

だけど、と輝は思う。

（せめてこの子には、目の前にいるこの子には、落ち着いて食事が出来る『普通』を与えてあげたい）

輝は神ではない。世界の全ての人に、彼の思う『普通』を与えてあげることなど出来やしないし、全ての人を救いたいなどと傲慢な考えも持っていない。

けど彼は、目の前の少年一人に彼が思う『普通』を与えることは出来る。

それはただの自己満足なのかもしれないし、ただの偽善なのかもしれない。

でも、救える力があるのに、本当に苦しんでいる人を見殺しにすることなど、輝は出来なかったし、したくなかった。

それに、と輝は思う。

（悲しみや苦しみを知っている人は、他人に優しくなれる。この子が立ち直った時、この子はきっと周りの人達を幸せにしようとする。自分のように苦しんでいる人を救おうとする。そうやって、この子は幸せの連鎖を作っていくだろう。そうなれば、少なくともこの世界は少しだけ優しくなる）

自分の境遇を嘆き、自分より下がいると他人を見下し生きていくことは実に簡単だ。

下に見られた人は、また他人を見下し、見下された人は自分よりも下を探し。

そうやって無限に続いていく悲しみの連鎖。

今の世界は、そういった負の連鎖が多すぎる。

誰かが、どこかで、それを止めなくてはいけない。

一人では無理だし、とても難しいことだと思う。

けど、いつか。

（まずは自分が。そして、海が）

少しずつでもいい。

悲しみに比べて優しさはとももろい感情だ。

けど、優しさは人の力になる。幸せの源になる。

そうやって少しずつ。そしていつか……。

「海。僕のチーズハンバーグ、食べるかい？」

チーズのかかったハンバーグをフォークに刺し海に向ける。

海は怪訝そうにフォークの先と輝の顔を見比べていたが、食欲の方が勝ったのか、おずおずと手をフォークに伸ばす。

しかし、海の手がフォークをつかむ前に輝の手が上へとあがった。

睨みつけてくる海に、輝は笑顔を浮かべ言う。

「海。こういう場合は口を開けるものだよ」
「……あ？」

意味がわからないといった表情の海。
輝は笑顔で「こういうことだよ」とフォークを海の隣に座る雫の方へと向ける。

「雫。あーん」
「——っ！」

あーんと言いながら、なんの躊躇いもなく輝のフォークを口にす
る雫。

それを見ていた海は息をのんだ。

「わかったかい、海。ほら、あーん」

再びフォークを向けてくる輝に、海は声をあげた。

「そんなこと出来るわけないだろ！？馬鹿かお前は！」

突然あがった大声に周囲の視線が集まるが、そんなものを気にする
ような輝ではなかった。

「なぜだい？親子では普通にするものじゃないか」

眉を微塵も動かさず、変わらない笑顔を海に向け続ける輝。もちろん、フォークもそのままだ。

輝の平然とした態度に、海の方が逆に狼狽する。

「お、俺は……お前らと親子なんかじゃ……」
「海」

海の言葉を遮ったのは雫だった。

怒気を含んだ彼女の声に、海は一瞬、体を震わせる。

雫の手があがったのを気配で察知し、海は目を閉じた。

……しかし、海の予想に反し、雫の手は優しく海の頭を撫でた。

驚き、海が顔をあげると、そこには優しい笑顔。

「あなたは、もう私達の大事な、大事な家族なの。親子じゃないなんて言わないで。悲しくなるわ」
「……」

ね、と笑みを深める雫に、海は肯定も否定も出来なかった。頭を撫でられながら、ただじつと雫を見つめていて。

（こいつらは……なに？こんな大人、俺は知らない……）

罵声を浴びせない大人。

手を繋ぐ大人。

食事を与えてくれる大人。

頭を撫でる大人。

笑顔を向けてくれる大人。

優しい、大人。

海が知っている大人達とは正反対の二人。

初めて見る大人に、初めて体験するやり取りに、海は心の底から戸惑った。

戸惑いを浮かべている海に、雫が優しく言う。

「いきなり、母と呼べなんて言わないわ。あなたがそう呼んでもいいと認めた時、その時に呼んでくれればそれでいいの。私達はそれまでずっと待っているから。でも忘れないで。私達にとってあなたはもう、大事な存在なの。大切な家族なの。そのことだけは、忘れないで」

そう言い、雫は自分の和風ハンバーグを一口分切り、海のハンバーグが乗っているプレートの上に乗せた。

「あーんは、海が私達のことを家族と認めてくれる時まで、楽しみにとっておくわ」

「ふむ。じゃあ僕もそうしよう」

輝も雫と同様に、海の前に差し出していたハンバーグを、彼のプレートの上に置く。

二人の顔を交互に見る海。戸惑いに揺れる瞳を、輝達は優しく見返した。

「……」

自分のプレートの上に置かれた、自分のものではないハンバーグ達。今まで他人の食料を、こんな風に貰ったことのない海は、とても戸惑う。

もう一度二人の顔を目だけで見やり、そしてハンバーグに視線を落とし。

そうやってじっくりと二人を観察してから、海はようやく、彼らから貰ったハンバーグへおずおずとフォークを突き刺した。

同じように二人を観察してから、ゆっくりとそれを口に運ぶ海。

「美味しい？」

雫の問いに、海は無言で、小さく頷いた。

「海。これなんてどうだい？」

「あら。こっちの方が素敵よ」

食事が終わり、海は同デパートの食器売り場へと連れて来られた。そこで海は、輝と雫にどちらのマグカップがいいか問われていて海がねだったわけではないのに、二人の間では既に購入することが決まっているようだ。

海はもう自棄になりながら、輝の手にあるマグカップを見る。

（……俺は親父か……）

そこにあっただのは、全体が渋い茶色で、縁が黒くなっているマグカップ。

世間的には悪い趣味ではないのだが、海の趣味ではないし、なにより海のような年代の少年が使うには早すぎた。

海は視線を雫の手元に向けて、目を覆いたくなった。

（俺は女か！）

そこにあっただのはピンクで、猫のキャラクターが描かれている、
可愛いマグカップ。

もちろん、海が気に入るわけではない。

「どっちもいやだ」

海が素直に告げると、二人は首を捻った。

「そう……？可愛いのに……」

「あんたがそう思っても、俺はそうは思わない」

雫に冷めた視線を送りながらそう言うも、彼女は気にするそぶり
すら見せなかった。彼女は海に笑顔を向ける。

「じゃあ他のを選ぶわね」

そう言い、海の手を引きながら本当に他のマグカップを物色しだ
す雫。一方の輝も、雫達とは反対方向の棚で、一つ一つ真剣に吟味
していて。

（本当、なんなんだこいつらは？）

今日何度目になるのかわからない疑問を、海は再び抱く。

なぜこんなにも真剣になれるのか。

なぜ自分なんかに意見を求めるのか。

海は全く理解出来ない。

今まで海が過ごしてきた家々では食器を与えられるだけマシだった。

ある家では空気として扱われ、食事も食器も与えられず、余りものや、深夜ゴミ箱を漁ったこともあった。

そんな日常を過ごした海にとって、この二人の行動は異常だった。
『無償の愛』というものが存在することを想像すら出来ない海は、
絶対なにか企んでいると、警戒心を増す。

そんな海の胸中を敏感に感じ取った雫は、より一層、海を愛そうと心に強く誓った。

そう意気込み、雫は視線の先に止まったマグカップを手に取り海に見せる。

「海。これはどう？」

「——だから！あんたの趣味で選ぶな！俺は男だ！」

海の怒りは、ある意味当然といえた。

なぜなら、雫が手にしたのは、またもや可愛いイラストが描かれた黄色のマグカップだったのだから。

いつの間にか海達の背後に来た輝は言う。

「そうだよ雫。海は男の子なんだ。そんな女の子らしいものを選んだら可愛いそうだよ」

海は輝の声がした方へと振り向いた。

無意識のうちに、味方が出来たと安心したのかもしれない。

しかし……。

「男の子の海には、こういうものが似合うと……」

「俺はおっさんじゃない！」

輝が手にしていた、またもや渋い色合いのマグカップを見て、輝の言葉を遮り海は声をあげた。

今までの家で、海は意見を言ったことはなかった。

初めの家に引き取られた時こそ、わがママを言ったり泣いたり、怒ったりしたことあった。

しかしその度に怒鳴られ、殴られ。

そういう日常を過ごしているうちに、海は自分の感情を表に出すことはやめた。出す時はたいてい最初だ。

そうやって海は、暴力や無視といった、自分の馴染んだ歪んだ日常を、一人きりの日常を作り出すようにしてきたのだ。

児童養護施設でも、輝達に引き取られることになった今日も。

海は意図的に皮肉を言ったり、暴言を吐いたり。

そうやって自分の慣れ親しんだ環境を作り出そうとしていた。

今までの家でも、児童養護施設でも、それは上手くいっていた。

海は常に一人きりだった。

しかし、今回は違った。

言われているうちに覚えてしまった暴言を吐いても、どんなに突き放すような、呆れるようなことを言っても、この二人は決して海を引き離すようなことはしなかった。それどころか進んで関わろうとしていた。

海の予定をことごとく裏切る二人に、海は戸惑いと一緒に、相当なストレスを溜めていた。

キレた、といってもいいだろう。海は今まで言ったことがないわがままを、ついに口にした。

「お前らが選んだら最悪なものになる！もついい！自分で選ぶ！」

海は知らない。この言葉を、海が自分の意見を言うのを輝達が待っていたことを。そのために二人は、わざと海が気に入らなさそうなものを選んでいたのだということ。

輝は微笑みながら言う。

「そうか。わかった。じゃあ海。肩に乗りなさい」

海に背を向けしゃがみ込んだ輝。それを見て、海は慌てた。

「なっ！？なに言ってるんだお前は！？」

狼狽する海に、輝は首だけを後ろに回し、海の顔を見る。

「なに、って肩車だよ。海の身長じゃあ、マグカップが見えないだろうっ？」

「それは……」

海はマグカップが置いてある棚を見上げた。

一番下の列のものがかるうつじて見えるくらいで、海はそれ以上上を窺い知ることも出来ない。

輝の言葉は正論だった。

事実だけに、悔しそうに輝を睨み付ける海。

しかしそんなことをしても海の身長が伸びるわけでも、棚が縮むわけでもない。

輝は言う。

「しないのかい、海？しないのなら、また僕達を選ぶことになるけど？」

「——っ！」

輝を睨む海の瞳に迷いが浮かぶ。またああいう、自分の趣味ではないものを何度も見せられるのは、流石に彼も嫌なようだ。

逡巡ののち、彼は心を決めた。不機嫌な表情のまま言う。

「……肩車って、どうすればいいんだ？」

輝と雫は驚いた。この年齢であれば、誰もが一度はやってもらった経験のあるものを、彼は知りすらもしないのだ。

輝は怒りに沸いた。海を今まで引き取り育ててきた、名も顔も知らない人物達に対して。

（彼らはこの子になにをしてきたんだ！？自分の子供でなければ、どうでもいいというのか……！！？）

輝がなにに対して怒っているのか、正確に把握している雫は、誇らしくなった。自分の伴侶に、彼を選んでよかったと、心から思った。

雫は、海の脇の間に手を入れ、優しく彼を抱き上げる。

「な、なにする……」

「これが肩車」

慌てふためく海を輝の肩に乗せ、雫は優しく笑った。

「海。きちんとつかまっているんだよ」

「は？……うわ！？」

理解を示さない海をよそに、輝は海の両足をしっかりと押さえ、立ち上がる。

突然の事態に、海は取り乱した。足が地面から離れる経験など、したことがなかったのだ。

落ちないように、輝の頭を思い切り抱きしめる。

輝は顔に苦笑いを浮かべながら言う。

「海。もう少し力を弱めてくれないか？流石にちよつと頭が痛いよ」

いくら線の細い体とはいえ、七歳の男の子。力はそれなりに強い。それに火事場の馬鹿力というものもある。海にとつて、地から足が離れる初めてのこの経験は、命の危機を感じるのに充分なものだった。

「だって……！こんな！足……！」

海が初めて見せた年相応な反応が嬉しくて、雫は小さく笑った。

口元に微笑みを浮かべたまま、彼らに歩み寄り、雫は海の背を押さえながら言う。

「大丈夫よ、海。輝さんはあなたを絶対に落としたりしないわ。心配だったら私が落ちないように背中を押さえていてあげるから。だから、ゆっくりと手から力を抜いてみて」

雫の顔を不安そうに見る海に、雫は優しく笑いかける。

「大丈夫よ。私達は絶対にあなたを落とさない。信じて」
「……」

海は考えた。本当に信じていいのかどうか。
これまでの言動を見ていると、この二人は海が知っている大人達
とはだいぶ違う。

しかしそれでも、と海は考えてしまうのだ。それほど、海の他人
に対する猜疑心の根は深い。

いきなりこんなことをされれば、海は絶対に信じなかっただろう。
しかし、この数時間の積み重ねが、二人の無償の愛が、少しだけ、
ほんのわずかではあるが、海の心を開いた。

恐る恐る、しかしゆっくりと、海は輝の頭を抱く腕の力を緩める。

「うん。まだちょっと痛いけど、怖いならそれくらいでも大丈夫だよ」

「怖がつてなんか……」

「じゃあ、背中を支える手を離しても大丈夫かしら？」

「——っ！」

笑いを含んだ雫の言葉に、海は再び輝の頭を強く抱いた。

「海……痛い……」

再び訪れた痛み^に輝が声をあげるが、それが海に届くことはなかった。

海は首を回し、雫を睨みつける。

しかし、雫は平然と笑顔を浮かべていた。

「嘘よ。離したりしないから」
「信じられるかっ！」

ほえた海に、雫は「あらあら、どうしましょっ」と笑っていて。

「輝さん。我慢出来る？」
「……なんとかね」

雫の質問の意図を正確に理解した輝は、頭痛に耐えながらも頷く。
雫は海の背中を押さえながら、輝に向かい言う。

「じゃあこのまま選びましょうか。海が信じてくれるまで、我慢してね」

「了解。じゃあ端から見て行こう」

そう言って歩き出す二人。

輝が一步踏み出す度に彼の肩の上にいる海は怖がり、目を閉じい

っそう輝の頭にしがみついたが、輝は無理矢理痛みに耐え歩き続けた。

マグカップが並ぶ棚の一番端まで歩き、輝は歩みを止める。

「さあ、海。好きなものを選んで」

輝の言葉に、海はつぶっていた目をおっかなびつくりと開く。

首を回し、雫の顔と背中の手を確認してから、海はゆつくりと視線を棚へと向ける。

並ぶ、様々な色と形のマグカップ。

海は言われるがまま、視界に映るマグカップを一つ一つ見やる。

しかし、海は戸惑った。

今まで彼に選択肢などは存在せず、ただ与えられたものを使っていたにすぎない。

彼は、自分で選ぶ、という行為に慣れていなかった。というより、輝達に引き取られ、彼は初めてその権利を与えられたのだ。

それゆえに、彼は選ぶという行為が、とても苦手だった。

輝達に引き取られることを決めたのは、どこにいても変わらないと思っただけだし、昼食の時彼がハンバーグを選んだのは、単に目

についたからにすぎない。

自分で言い出したことではあるのだが、海はとても困っていた。
なにを選んだらいいのかわからないのだ。

輝が選んだような年配向けなものと、雫が選んだような少女向けなものは除外するとしても、それでもまだ種類はある。

（でも、どれでもいいとか言つと、こいつらはまた変なものを持ってくるし……）

どうするべきか、海はとても頭を悩ませた。本人は自覚していないが、海が悩むなど、実に数年ぶりのことだ。

それと、これも海の意識の外のことだが、彼が悩むことによって輝を抱きしめる力が弱められ、輝は胸を撫で下ろしていた。

もう一度この棚を見やるが、やはり『これ』というものはなく。

海はため息を吐いてから、輝に告げた。

「……向こう、見たい」
「わかったよ」

頷き、隣の棚に歩き出す輝。

その時、海が再び彼の頭を強く抱いたのは、言うまでもない。

先ほどまで見ていた隣の棚の前で輝は足を止める。

彼に促され、揺れが治まったのを確認した海はゆっくりと目を開け、先ほどと同じように一つ一つ見ていく。

しかしそれでも海はなにを選んだらいいのかわからず。

（この際、適当に選べばいいか）

そう思った時だった。海の目に、あるマグカップが留まったのは。

それはいたってシンプルなマグカップだった。

飾り気もイラストもない、全体が水色のマグカップ。

自分でもなんでそれが気になったのか全くわからない。

しかし、それを見た瞬間、それにしようと思っていた。それ以外目に入らなくなってしまった。

「…………あれがいい」

輝の頭に抱きつきながら、海はそれを指差す。

海の指先を追い、輝は腰をかがめ一つのマグカップを指差した。

「これかい？」

輝が指差したのは、あるキャラクターが描かれたマグカップ。
まさか海のような少年が、飾り気のないものを選ぶとは思わなかったのだろつ。

「……その隣」

海はきちんとそれを否定し、自分の意見を述べた。

——彼は気づかない。

流されるでもなく、ただ受け入れるでもなく、今、きちんと自分の意見を言ったことに。

海の指示に従い、輝は隣の、海が選んだ水色のマグカップを手にとった。

「これ？」

首を捻り、横目で海の顔を見ながら輝は聞いた。それに対し、海は無言で、小さく頷く。

海は、急に怖くなった。

今彼は、初めて選択肢を与えられ、そして自分の意思で選択をした。

……だからこそ怖くなったのだ。

もしもそれを否定されたら、そう考えて、海は怖くなった。

確証があるわけではないが、今、海の見解が少しでも否定されたなら、彼は二度と自分の意思を持つことは出来ないだろう。

しかし……。

「なるほど。海はこういうシンプルなものが好きなのか。いい趣味をしているね」

「え……?」

輝はマグカップを見ながら海のことを褒め。

「いい色ね。海の名前と同じ、海の色。綺麗な水色」

雫も輝と同じように、少しも海の意見を否定しなかった。それどころか認め、優しい笑顔を海に向けているのだ。

この時海は、自分の胸に暖かい『なにか』が生まれたのを感じた。その暖かい『なにか』が胸にあると、なぜか笑いたくなって、そして、無性に泣きたくなって。

知らないもの。経験したことのないもの。
……けど、不思議と怖くはなかった。

「それじゃあ海。次はお箸を選ぼう」

輝の言葉に、海は静かに頷く。

海は自覚していない。

胸に暖かい『なにか』が生まれてから、輝の頭に抱きつく力が弱まっていることに。目を、閉じなくなっていることに。

海は知らない。

その『なにか』が自分を変えることになることに。

海は、気づいていない。

自分が今、小さい笑顔を浮かべていることに……。

夕方の国道を、輝が運転するレクサスはスムーズに、しかし丁寧に走っていた。

急ブレーキを絶対に踏まないように、車間距離を充分に空けて走る安全運転。

輝は普段から丁寧な運転をするが、今回は特別丁寧に運転していた。

その理由は、後部席にある。

後部席で、海は雫の膝の上に頭を乗せ、小さな寝息を立てていた。

この体勢は、もちろん海の意味ではない。

彼がドアに体を預け眠っていたところを、雫が抱き寄せ今の体勢にしたのだ。

冷たい瞳と毒舌はなりを潜め、代わりに浮かんでいる幼い表情。

眠る我が子を起こさないように輝は丁寧に運転をし、雫は海の頭を優しく撫でていた。

信号が赤に変わり、輝は車をゆっくりと停車させる。

完全に止まったことを確認し、ギアをニュートラルに入れサイドブレーキを引く。

そうやって完璧な安全を確保してから、輝は後部席を覗き込む。

「熟睡してるね」

「ええ。きっと疲れたのよ。海にとって、初めての外出だったから」

雫の言葉通り、海は疲れきっていた。

自分の知らない大人。

自分の知らない感情。

自分の知らない世界。

そして、初めての選択。

肉体的にも、精神的にも、海は疲れきっていた。

膝の上の重みを感じながら、優しく頭を撫で続ける雫。

彼女の表情はとても愛おしそうで。

妻の膝の上で眠り続ける海に、優しく微笑みかける輝。

彼の表情はとても嬉しそうで。

自らの子供にさえ愛情を抱けない親が急増している今のこの世界。
しかし、彼女には、彼には、確かにそれが存在していた。

自分の血肉を分け与えたわけではないのに、海は心から愛されていた。

我が子を嬉しそうに見つめる輝。しかし、彼は一つ失念していた。
ここが『どこ』であるのかを。

信号が変わっても走り出さない輝の車に苛立った後ろの車が鳴らすクラクション。

それを聞き慌てて運転を再開する様子を、雫は小さく笑いながら見ていた。

（不覚だ……！）

雫に起こされ自分の体勢を理解した時、海は心の底から眠ってしまったことを後悔した。

デパートでいろいろな体験をして疲れていた海は、心地よい車の揺れに次第にまぶたが落ちていくことを自覚した。

眠るものか、と何度か抵抗してみるも、どうしてもそれに逆らうことが出来ず。

仕方なく、彼は体の求める休息をとることにした。

絶対に雫の方に倒れないようにドアの取っ手を握り、そのままドアに体を預け眠りについた、はずだった。

しかし、実際彼が目覚めたのは雫の膝の上で。

海は慌てて彼女から距離を取り、羞恥に顔を赤らめながら彼女を睨みつけた。

「……なんで俺を動かした？」

海は基本的に寝返りをうたない。そういう風に体が『出来て』しまっている。

とある家では動いただけで理不尽な暴力を受けたこともあるし、寝具すら与えられなかったこともある。

そういう理由で、海はどこでも、どんな体勢でも寝られるようになり、寝返りもうたないようになってしまった。

だからわかるのだ。雫の膝の上で寝ていたのは、自分が動いたからではなく、彼女の手によってなされたのだと。

彼女を睨みながら、海は自分自身にも苛立っていた。

（なんでこの女に触られて起きなかった！）

海はかつての経験から、寝ている自分に誰かが触れば自然と目覚めるようになっていた。

その能力がなくなっただけではない。

事実、彼は二日前、熟睡中の自分に教員が触った（正確には毛布をかけようとしていただけなのだか、海はそう認識していなかった）瞬間に目を覚まし、その教員から距離を取ったのだから。

その能力が発動しなかったことに、海はとても苛立っていた。海にとって、あの能力は生きるために必要なものだから。

海の睨みに一切怯まず、雫は笑った。

「だって海ったらドアに寄りかかって窮屈そうに寝ているんですもの。見ていてかわいそうだったし、それに私が海の寝顔を見たかったから。だから抱き寄せて膝枕をしたの」

雫の言葉に海は眉を寄せた。

彼女がなんでこんなことを言うのか全く理解出来なかったし、彼

女の言葉の中に知らない単語があったからだ。

「ひざ、まくらって……なに？」

今朝までの海が今の自分を見たら、とても驚いただろう。

彼は自発的に質問をするような子供ではなかった。知らない単語を思わず口に出すことはあっても、それを尋ねるようなまねは決してしなかった。

この半日雫達と過ごしたことで、彼の中で確かな変化が起きていた。

むろん、本人は気づいていないが。

海の質問に、雫はもう驚くことはなかった。

彼が暴力や暴言に詳しい反面、愛情や親しい間柄するコミュニケーションに疎いことを悟ったからだ。

（だったら私達が教えてあげればいい。そうやって一緒に成長していけばいい）

雫は海に微笑みながら言う。

「膝枕っていうのは、言葉通りよ。さっきまで海が眠っていた体勢

のことよ」
「——っ！」

雫のその言葉で、海の顔は再び赤くなる。彼女の言葉で、一瞬忘れていた羞恥がよみがえったのだ。

海が再び雫を睨み出した時、海の座っている方のドアが開いた。

驚き海が振り返ると、そこには笑顔の輝。

彼を見て初めて、海は車が停まっていることに気がついた。

輝は言う。

「海。着いたよ。さあ、降りて」

笑顔で差し出される手。海は輝の顔を呆れた表情で見る。

「あんたもこりないな。いい加減悟れよ」

そう言い、海は輝の手を『三度』叩いた。

そう。輝がこのように海の手を差し出したのは今回が初めてではない。

デパートに着いた時。デパートから車に乗る時。そして、今。

輝は海が車に乗り降りしようとする度に、こうして彼に手を差し出していたのだ。

結果は、毎回一緒だったが。

「やれやれ。海は素直じゃないねえ。雪には膝枕までさせていたくせに」

肩をすくめてそう言った輝に、海は顔を真っ赤にし、ほえる。

「あれは俺がしたんじゃない！こいつが勝手にやったんだ！」

「だったら、僕も勝手にやっていいんだね？」

「は？なに……っ！」

輝は言葉を言い終わると同時に車の中に腕を伸ばす。

海が危険を察知し距離を置くよりも早く、輝は海の両脇に腕を入れ抱きあげた。

「——っ！離せ！なにするんだお前は！？」

抱きあげられておとなしくしている海ではない。手足をバタつかせ、精一杯抵抗した。

「いや、海！痛い！痛いってばはあ！？」

無秩序に振り回される手足が、頭や胸、そしてみぞおちにきまり、輝は息を吐いた。

あまりの苦しさに輝は胸を手で押さえなくなる。しかし、空中で手を離してしまえば海を落としてしまうことになる。

だから輝は氣力を振り絞り、海を地面におろし、そしてそのまま胸を押さえながらしゃがみ込んだ。

「か、海……流石にみぞおちは反則じゃないかい……」
「自業自得だ！」

海は肩を上下させながら輝を睨む。彼の顔はまたもや真っ赤だった。

海はこういった肉体的コミュニケーションに不慣れだった。というより体験したことがなかった。

そのため恥ずかしくてしかたなかったのだ。

「まあ。輝さん大丈夫？」

海達がそんなやり取りをしているうちに車からおりた雫が、自分の頬に手を添えながら言う。

輝は顔をあげ、雫に苦笑いを向けた。

「なんとか、ね。はは……」

「そう。じゃあ、買った荷物、お願いね」

「え……」

天使の微笑みで悪魔の言葉を言う雫に、輝はその表情のまま固まった。

雫はその微笑みを海に向け言う。

「それじゃあ海。私達は先にお家に入りましょう」

「え……あ、うん……」

自然と手を握ってくる雫に、海は流されるようにして頷いた。

振り返り、しゃがみ固まっている輝の顔を見て、自分の手を引きながら歩く雫の顔を見て、海は今度こそ彼ら夫婦の力関係を把握した。

（こいつが強いのか、あいつが弱いのか）

『尻に敷かれる』という言葉を知らない海は、そんなことを考えながらもう一度雫の顔を見て、いまだ固まっている輝の顔を見た。

——この時、海はそれ以上のことを思わなかった。感じなかった。自分が『手を引かれる』という、肉体的コミュニケーションをとっているというのに。

デパートで最初に手を繋がれた時は、とても居心地悪そうに、不機嫌になっていたというのに、今では自然と手を引かれていて、居心地の悪さも不機嫌さも彼の顔には見えない。

慣れてしまったのだ。

この半日、輝と雫に何度も何度も手を繋がれたため、彼らと手を繋ぐという行為が、海の中では自然となりつつあった。

もちろん本人に言えば否定し、今すぐ手を振りほどくだろう。だが雫は、そんな愚行をするような愚者ではなかった。

海の変化を喜び、雫は海を優しい顔で見る。
それを向けられた海は訝しそうに眉を寄せて雫を見返していたが、口を開くことはなかった。

（こんな風に、少しずつ海と親子になっていきましょう。焦ることなんてなにもないわ）

雫はそう思い、海に優しく微笑む。

海は益々訝しい表情をしたが、やはり口を開くことはなかった。

車庫から数歩歩いたところで雫は足を止める。

疑問を浮かべ雫の顔を見る海に、彼女は優しく笑いかけ言った。

「海。ここがあなたが今日から暮らす家よ」

雫に言われ、手で示され、海は初めてそこに家があることに気がついた。

笑顔を向けてくる雫の内心を探ろうとして、彼女の顔ばかり見ていたため、他のことに目がいかなかったのだ。

「……」

海は雫が示した家を見て、驚き声を失った。

海は今までいろいろな家をたらい回しにされてきたので、様々な家を知っている。

平屋。二階建て。マンションの一室。築数十年の家もあれば新築の家もあった。

そんな風に様々な形容の家を見てきた海だが、それでも今目の前にある家には驚いた。

見たことがなかったのだ。ここまで綺麗な家は。

広い庭には緑と季節の花々が見事に咲き誇り。

二階建ての白い家の壁にも窓にも汚れは一切ない。

今まで海が引き取られた家にも庭に木々や芝生、花々がある所もあつた。

しかしこの家のそれは、輝きが全く違つた。

植物に全く詳しくない海でもわかるくらいに、この家の植物達は丁寧に、きちんと手入れをされていて。

そして、外見を見ただけでわかるくらいに、家を丁寧に掃除しているのがわかつた。

一目でわかるくらいに綺麗な家。海が今まで見てきた中で、一番綺麗な家。

ア然とし、口を開いて固まる海を見て、雫はくすくすと笑つ。

「海。気に入ってくれた？」

雫の言葉で、海はようやく動きを取り戻す。

一瞬雫の顔を見て、すぐにバツが悪そうに顔を逸らす。

そして不機嫌な表情を作り、言つた。

「……別に。家なんて、ただ住む場所だし」
「それは違うわ、海」

海の言葉を、雫は即座に否定する。

彼女はそのまま、海の頭を優しく撫でながら言う。

「家ってというのは、住むためだけの場所なんかじゃない。家族が集まって団らんをする場所なの」

「家族が……集まる……？」

海は眉を寄せる。

雫の言葉の内容を、海は理解出来なかった。意味がわからなかった。

先ほどの海の言葉通り、彼にとって家というのは、ただ暮らすだけの存在でしかない。

寝起きして、雨風を防いでくれる場所。

それが海にとっての家だ。

だから彼は理解出来ない。雫の言葉の一かけらも。

雫はしゃがみ、海と目の高さを合わせ、続けた。

「そう。朝起きて『おはよう』を言い合って。出かける時は『行っ

てきます』、『行つてらっしゃい』を。帰つて来た時は『ただいま』、『お帰りなさい』を。寝るときは『おやすみ』を言い合つて。一緒にご飯を食べて、今日あったことを話し合う。それが、本当の家。これからあなたが暮らす家」

「――っ」

そう話した雫の顔が優しくて。

今まで自分の世界の外で行われていた行為に自分が加わることに驚いて。

海は瞳を大きく見開いて、雫を見た。

彼の瞳から目を逸らさず、雫は優しく微笑み海の頭を撫でる。

海は、動けなかった。瞳を逸らせなかった。

彼の体は、完全にフリーズした。

今、彼の頭の中では、葛藤が起きている。その葛藤に、必死になっている。

そのため海は体のコントロールを手放したのだ。

彼の葛藤。それは、信じ、彼らを受け入れるか否か、だ。

彼の知る大人は、彼にこんなことを言つてはくれなかった。

どの家にも居場所なんてなかった。

名前だけの『家族』だった。

しかし、雫は、彼女達夫婦は、自分と名実共に『家族』になろうと言っているし、行動にも現れている。

……嬉しさよりも戸惑いの方が大きかった。
どうしたらいいかわからないし、なにを言ったらいいのかもわからない。

虐待を受け続けてきた彼にとって、虐待が普通だし、日常だった。海の世界には、それしかなかった。

だから、戸惑う。困る。いきなり、こんな風に優しくされても……。

（わからない……。どうしたらいい……。？確かにこいつらは今まで
の大人とは違うけど……。けど……。！）

「……そんなの……。最初だけだ……」

葛藤に決着がついた海は、雫から顔を逸らし、そう呟いた。

結局、海は拒絶した。自分の世界に引きこもった。

……裏切られるのが怖いから。

それは海の防衛本能の一つだったのだろう。歪んだ防衛本能。

『非日常』な『日常』で育ったがゆえに生まれた歪んだ世界。

海の幼い心は、壊れていた。

……だが、彼はまだ知らない。

壊す存在がいれば、それを癒す存在だっているということに。

雫は海の顔を両手で優しく挟み、自身の方へと向ける。

彼女のそんな行動に驚いた海は、思わず彼女の目を見てしまう。

そして彼は目にした。

強い意志が込められた、優しい、瞳を。

「最初だけかどうか、それはあなたが確かめて。あなたが見極めて。そして、自分で答えを出しなさい。あなたは一人なのかどうかを」
「……」

海は、再び雫の瞳から目を離せなくなった。

先ほどのようにフリーズしているのではない。

魅入ってしまったているのだ。

今まで見たことのない、透き通った綺麗な瞳に。

雫は海の鼻を優しくつまみ、そして彼の手を取り立ちあがった。

「さあ、家に入りましょう」

優しく笑う雫。

そんな彼女の瞳を、海は手を引かれながら、ずっと見つめていた。

この日の近藤家の夕飯は寿司だった。
外食したわけではない。出前を頼んだのだ。

リビングにあるガラスのテーブルの中央に置かれた丸い漆塗りの
器。

そのテーブルに対応した白い四脚の椅子の一つに座った海は、初めて目にしたこの食べ物の食べ方がわからず困っていた。

それを悟った雫が、箸で寿司をつかみ、自身の前に置かれた小皿の醤油をつけ、食べて見せる。

わかった？という意味を込めた笑顔を海に向けると、彼は肯定も否定もせず、黙って寿司に箸をのばし、その内の一つをつかむ、ことは出来なかった。

つかんだと思った瞬間、寿司が箸から落ちてしまったのだ。

海は、今までこうして家族で食卓を囲むことなど、一度としてしたことがなかった。

いや、正確には彼の両親が亡くなるまではしていたのだが、海はそれを覚えていない。

そのため、彼は箸の使い方を誰からも教えてもらったことがなく。

学校で他の人達が使っているのを見て、見よう見まねで使うため、箸の使い方がとても下手だったのだ。

何度か挑戦してみるが、どうしても上手くつかめず。

海の横に座り、それを見ていた雫が手を動かした。

——瞬間、海は目を思い切りつぶる。
叩かれると思ったのだ。

「海。お箸はね、こうやって持つのよ」

しかし海が想像していた痛みはこず、代わりに右手が温もりに包まれた。

海が驚き目を開くと、雫の笑顔があつて。

自分の右手を見ると、彼女が両手を使って箸の持ち方を直してくれて。

「それで、こうやって」

彼女はそのまま海の手を持ち、寿司の方へと移動させる。

海も、そのまま自分の手を目で追う。

雫は、海が何度もつかみ損ねた寿司の所まで海の手ごと箸を移動

させた。

海の手を操りながら、雫は優しく言う。

「こうやってお箸を開いて、こうやって挟んで」

丁寧に、丁寧に。幼い海がきちんと理解出来るように、ゆっくりと雫は説明をする。

「あ、力を入れすぎちゃ駄目よ。お米が崩れちゃうから、優しくねそう。それくらいの力で」

雫に言われるがままに行動する海。

彼は今、反抗することすら忘れている。

彼は今、夢中になっていた。

今まで上手く扱うことが出来なかった、箸の正しい使い方を学ぶことに。

「そう。それで優しく持ち上げて。でも力を抜きすぎても駄目よ。海、もう少しだけ力を抜いて。そう！そのくらい！」

雫の言葉に従い、力の強弱をつける海。

そうして正しい形で、適切な力加減でつかまれた寿司は、宙を動いた。

「海、お醤油のつけすぎに気をつけて。しょっぱくなっちゃうから……そう。それくらい。あとはそのままお口に運んで……」

雫に導かれるがままに海は手を動かし、自分の前に置かれた小皿の中の醤油（寿司はわさび抜きになっており、また、海の小皿には醤油しか入っていない）を少しつけ、そのまま口へと運んだ。

途端に海が目が見開かれる。

驚いたのだ。そのあまり美味さに。

彼が口にしたのは鯛だ。旬もので脂ののった鯛は口の中で溶け、あとに残る酸味のきいた酢飯が鼻孔をくすぐる。

海は知るよしもないが、輝が注文をしたこの寿司屋はこの辺りでは名前の知れた老舗。美味しいのも当然といえた。

海は感動のあまり、もう一つ食べようと手を伸ばそうとして——途中で動きを止めた。

そして、窺うように輝達の顔を見やる。

「どうしたの、海？」
「……」

雫の問いにも海は答えない。

彼女達の顔色と、寿司達を交互に視線だけが行き来する。

それを見て雫は悟った。

海に笑顔を向け言う。

「好きなだけ食べていいのよ、海。それに、足りないようなら言うて。追加するから」

優しい笑顔の雫。海が顔を向けると頷く輝。

それに対し、海はなにと言わない。ただこくと頷き、先ほど彼が食べたものと同じ寿司に箸を伸ばした。

雫に教えてもらったばかりの、ぎこちない箸使い。

しかし、ぎこちないながらも彼は目的のものをつかみ、先ほどと同じように醤油をつけ、口に運んだ。

一個、二個と、その後も海の箸は止まらず。

海は「美味しい」とは言わない。だが輝達はわかっていた。

海がそう感じているのを。

減っていく寿司の量に比例して、少しずつ上手くなっていく海の箸使い。

その様子を雫は優しく見つめ、輝はそっと席を立ち、追加の電話をいれた。

「海。少しお話しをしたいんだけど、いいかな？」

夕食が終わり（結局海は、二人前近く寿司を食べた）海が水色のマグカップでお茶を飲んでいると、彼の正面で同じようにお茶を飲んでいた輝が口を開いた。

海は育った環境ゆえ、人の変化にとっても敏感だ。

なにがどう変わったと説明を求められても海は答えることが出来ないが、彼は輝の雰囲気が変わったことを敏感に感じ取った。

マグカップをテーブルに置き、警戒しながら答える。

「……なに？」

しかし、輝とて阿呆ではない。

海が警戒していることを一瞬で見抜き、笑顔を浮かべ顔の前で左右に手を振る。

「いや、変な話じゃないんだ。だからそんなに警戒しないでくれ」

「……」

だが海は警戒を緩めなかった。緩めたことで痛い目にあったことがあるからだ。

そんな海に輝は苦笑いを浮かべる。

（まあ、仕方ないか。いきなり信じてもらえるわけもない）

ゆっくりいこうと輝は決め、口を開く。

「海は、学校には行きたいかい？」

「……」

輝の問いに、海は目を細める。輝の真意を探ろうとしているのだ。

（……こんな風に常に人を『観て』きたんだな、この子は。……自分を守るために）

普通の小学生、いや、大人でさえ出来るかどうかかわからない、人の内面まで探ろうとする冷たい瞳を、輝は見つめ返した。

自分にやましいことがないことを証明しようとしたのだ。

約一分近く、海は輝のことを『観て』いた。
その間、輝は一ミリたりとも彼の瞳から目を逸らさず。

（今までの大人はこうするとだいたい目を逸らすか、暴力を振るった。……やっぱりこいつらは違うのか……？）

初めてのことに、海は戸惑う。

だが、このまま『観て』いてもなにも変わらなそうなので、海は次の手に出ることにした。

『観る』ことはやめ、しかし冷たい瞳のまま輝に言う。

「学校には行きたくない」

これは海の手であり、同時に本心だった。

海は学校が好きではない。

親に愛され、のうのうとなにも考えず生きている同年代のクラスメート達を見ているとイライラするのだ。

それに、自分が違う存在だと思い知らされるから……。

だから海は学校が嫌いだった。行きたくなかった。

そのことを、海は以前、他の家で言ったことがある。
それに対する返答は……拳だった。

世間体がどうか、養われている身分で口にするなどが、そういった理由で海は殴られ、学校に行くことを強要された。

（これでわかる。こいつらが、本当に違うのかどうか。さあ、本性をさらけ出せ！）

そんな思いで、海は輝の反応を待った。
もし殴られてもいいように、歯を食いしばり、体に力を入れる。

そうした、ある種の臨戦態勢をとった海に向けられたのは、暴力でも、世間体を気にした自己保身の言葉でもなく、優しい、笑顔だった。

「そうか。じゃあしばらく学校はお休みしよう」

「へ……？」

「雫もそれでいいかな？」

「ええ。海が行きたくないって言ってるんですもの。無理に行かせ
ることはないわ。あ！じゃあ海の勉強は、私が見てあげましょう！」

ぱん、と体の前で手を打ち合わせ笑顔を浮かべる雫。

予想外の展開に海が固まっているうちに、話しは彼を取り残して
どっどん先に進んでいった。

「雫……。それはずるくないかい？僕だって海に勉強を教えてあげ
たいよ！」

雫は口元に手をあて、くすくすと笑う。

「あら。それは無理よ。だって輝さんは仕事があるでしょ？だから
海の先生は私がやります」

「それは……。でも、雫にも仕事があるじゃないか！？」

「私の仕事は家でも出来ますから」

「ずるっ！」

失権乱用だとか、僕も海と一緒にいたいとか、そんなことを叫ぶ
輝だったが、雫が小さく笑うと、それがぴたりと止まる。

「輝さん？」

輝は知っていた。

雫がこういう笑い方をする時は、決まって怒っている時なのだと。
その証拠に、笑う彼女の目は、一切笑っていない。

「……おとなしく仕事に行きマス」

輝は知っていた。

普段温厚な彼女は、怒った時だけはとても怖いことを。

なるべく雫の目を見ないようにしながら、輝はそう、頷いた。

そんな風に勝手に完結する会話に海は混乱しながらも、口を開く。

「……いいのか？」

「うん？なにが？」

海の言葉に反応したのは雫だった。

先ほどまで輝に向けていた威圧感は消え去り、優しい笑顔で海に問いつ返す。

海は雫の目を見ながら言う。

「学校に行かなくて、本当にいいのか……？」

雫は首を傾げながら海に問う。

「行きたくないんでしょ？」

「そうだけど……でも世間体とか……」

「海」

雫は海の言葉を、彼の名前を呼ぶことで遮った。

そのまま海の頭に手を乗せ、海の頭を撫でながら雫は言う。

「そんなもの気にしなくていいわ。私達はあなたの意志を尊重する。だから行きたくなければ行かなくていいのよ。その逆もそう。行きなくなったらいつでも行つていいの。その時は遠慮せずに言つてね」

優しく笑う雫に、海は無言で頷くことしか出来なかった。

——海は確信した。彼らは今まで海が出会ったどの大人とも違う。優しく、暖かい大人だ。

（でも……信じていいの……？もしかしたら、こうやって信頼させて、それから裏切るんじゃない……？）

一度そう考えてしまうと、猜疑心は止まらない。

海の思考は暗い闇に落ちていく。

(……やっぱり信じるのはやめよう。それが一番いい)

海がそう結論づけた時、彼に輝が声をかける。

「さて、海。そろそろお風呂に入って寝ようか？」

「え……？あ、うん？」

急な呼びかけに、海は戸惑う。

闇に落ちていた感情を引き戻し、輝に視線を向ける。

……そこにいた輝の顔を見て、海は軽くひいた。
輝の顔が喜びで輝いていたからだ。

輝は席を立ち、海に近づき、彼の手を取り言う。

「さあ！海！行こう！」

「い、行くってどこへ？」

あまりの勢いのよさに戸惑う海を置き去り、輝のテンションはどんどん高まる。

「どこって、お風呂だよ！今頷いたじゃないか！」
「風呂……？」

海は前後関係を思い出す。

確かにいきなり話しかけられ頷いた記憶はあるが、それはあくまで疑問形でだ。肯定したわけではない。

しかし、と海は思った。

（風呂に入らせてくれるならいいか）

食事すらもとに取ることが出来なかった海が、まともに風呂に入ることを許されるだろうか？

答えはもちろん、否だ。

もちろん世間体を気にするため、臭いまま放置するわけにもいかない。

そのため、海はその家の住人が全員入った後の残り湯を使って体と頭を洗うことのみ許された。

もちろんシャンプーやコンディショナーなどの使用が許されるわけもなく、海は体も頭も石鹸で洗っていた。

確信があるわけではないが、この夫婦なら自分も温かいお湯の張られた浴槽に入ることを許してくれるのではないかと海は思っていた。

それは現実のことになる。

……ただし、またもや彼の予想の範疇を超えた『おまけ』がついてくることになるが。

「さあ、海！一緒に入ろう！」

「……………は？」

いい笑顔をした輝の楽しそうな声。

その言葉を海が理解するには、しばしの時が必要となる。

（入る？どこへ？一緒に？どこへ？）

会話の流れを海が理解した時、海は顔を真っ赤にして叫んだ。

「ふ、ふざけるな！なんでお前と一緒に風呂に入らなきゃいけないんだ！？」

輝の手を振りほどき、海は輝を睨む。
だが輝はそれを全く気にしなかった。

輝は言う。

「だって、海家のお風呂の使い方わかるかい？第一、海が一人で家のお風呂に入ったら、多分溺れるよ？」

「くっ……！」

正論だった。それに輝に嘘をつく理由なんてないし、仮に嘘をついているようなら海はわかる。

だから海は言葉に詰まった。

なにか回避する方法は、と頭を働かせるが、なにも打開策は浮かばず。

（どうする？どうする？）

テンパる海。そんな海に女神が現れた。

「輝さん」

いつの間にか海の後ろに立っていた雫が、輝を不機嫌そうな表情で見つめていた。

（助かった……！）

海がそう安堵の息をこぼした、まさにその瞬間だった。

「輝さんだけ海と一緒に入るのはずるいわ。みんな一緒に入りましよう」

女神は実は悪神だったのだと、海が悟ったのは。

「それはいい考えた。じゃあ親子みんなで入ろう」
「ええ。行きましょう」

デパートの時のように両側から海の手を握る近藤夫妻。
そのまま引きずられるように海はバスルームまで連行される。

「ちよ、待つ……！ふ、ふざけるなーっ！」

この一日の出来事の中で、一番の試練が海を襲った瞬間だった。

近藤家二階にある輝達の寝室。

壁際に佇むダブルベッドの中央を占拠し、眠る海。

自分の体を抱くようにして、体を丸めて。

その様はまるで外敵から身を守るように見えて。

輝は海の頭を優しく撫でる。

トリートメントまでしつかりとされた髪は、とても柔らかく、指の間を綺麗な黒髪が流れる。

「ん……」

頭を撫でられ海は小さく声を漏らす、目を覚ますことはなかった。

「よく寝ているみたいだね」

「ええ。きつと疲れたのよ」

輝に同意し、頷く雫。

疲れた理由、入浴時のことを思い出して、彼女は小さく笑った。

雫達の想像通り、一緒に入浴することを告げたら海はとても抵抗した。

騒いで暴れて。

けど、それでも別々に入るようなことはしなくなかったので、雫が輝に言い、海を抱き上げて無理矢理浴室まで連れて行ったのだ。

海の抵抗は浴室に入ってからも続いて。
だが雫と輝には切り札があった。

海の身長では、浴槽に座って入ることが出来ない。
そのため、輝が海を抱き一緒に浴槽に入ると海は怯え、おとなしくなったのだ。

ちょっと卑怯だったかな、と雫は思うが、そうしないと一緒に入れなかったのだから仕方ない。彼女はそう結論づけていた。

そうやって一緒に風呂に入り、一緒に頭と体を洗い。
買ってきた下着とパジャマを着せて、歯を磨いて。

そうやって三人で手を繋いで寝室まで一緒に行くころには、すでに海はとても眠そうで。

そんな海だが、雫達の寝室にあるダブルベッドを見て目をむいて

いた。

ここまで大きいベッドを、彼は見たことがなかったのだ。

一緒に寝ることを告げるとまた暴れるかな、などと雫が考えているうちに輝が海を抱いてベッドに横にさせ。

ベッドの柔らかさに驚いていた海だったが、暴れ疲れていたせいもあり、すぐに夢の世界へと落ちていった。

海の頭を撫でながら、輝は言う。

「こうして眠っているのに、まだどこか警戒しているね……」

「……院長先生のお話だと、眠っているこの子に触ろうとするとすぐに目を覚ますらしいわ。今は疲れてよく眠っているけど、きつとそういう能力を身につけないといけないくらい、過酷な環境に置かれていたのよ……」

「……悲しいね」

そう言った輝の顔は本当に悲しそうで。

そんな夫の姿に雫は微笑み、海の頭を撫でている輝の手に自分の手を重ねた。

顔をあげた輝の目を見ながら、雫は言う。

「心に傷を負わせる人もいれば、その傷を癒す人もいるわ。だから、海が今まで負った傷を癒せるくらい、私達が愛せばいいの。そうや

つてこの子に安心して自由に生きれる毎日をあげればいいの。時間はかかるだろうけど、大丈夫。だって、もうすでにこの子は家族なんですから」

「……そうだね」

輝は優しい笑顔を浮かべ、もう一度海の頭を撫でる。

「この子が毎日楽しく、笑ってすごせるような、そんな家族になっていこう」

「ええ。そうね」

わが子を見やり微笑む夫妻。彼らの瞳は優しさで満ち溢れていた。

海の朝はとても早い。

といつても、意識的に起きようとして目覚めているのではない。
太陽が昇る時間には、勝手に目が覚めてしまうのだ。

これは彼の自己防衛の術の一つ。

「いつまでも寝ているな」と理不尽な暴力を受け続けた結果、彼
が自分の身を守るために身につけた悲しい特技の一つだった。

目を覚ましてすぐには、海はここがどこだかわからなかった。

目に映る、白く、染み一つない綺麗な天井。
体を包む、柔らかく温かい布団の感覚。

今までの自分の世界にはなかったものに、海は混乱する。

(どこだ、ここは?)

そんなことを思いながら、海がふと横を向くと。

「——っ!？」

こちらを向き、寝息を立てている美しい女性が目に飛び込んできた。

ふんわりとして艶のある肩までの茶髪。

スッピンであるのにも関わらず、肌は綺麗で水々しく、閉じている目から伸びるまつ毛は長くて。

とても優しそうな雰囲気を出している女性、近藤雫の姿を見て、海は全てを思い出した。

（そうだった……。俺はこいつらに引き取られたんだ……）

前後関係を全て思い出した海は、そのまま首を反対へと向ける。

案の定そこにいる、雫と同じように自分の方へと顔を向けて眠っている男性。

清潔に整えられた、短くも長くもない癖のない黒髪。

その下にある少年のような顔は、雫と同じように綺麗で。

海が今まで引き取られ、見てきた人達の中でも、群を抜いてこの二人は綺麗だった。

「……ていうか、なんで俺はこいつらと一緒に寝てるんだ……？」

昨日、このベッドに寝かされた記憶は海にはある。
しかし、その後の記憶は一切なくて。

だから海は、こうなった経緯がわからなかった。

(……ま、いいか。こいつらならやりそうだし)

昨日の一連の出来事を思い出し、海はそう考えることにした。

それより、と海は恒例の行事を始める。

布団の中で体をゆっくりと動かし、異常がないかどうかを確認していく。

様々な暴力を日常的に受け続けた海は、朝起きてすぐに自分の体の『点検』をすることが日課になっていた。

(暴力を受けた跡は……ないみたいだな。縛られたりもしていない、と)

痛いところは一切なく、手足も縛られていない。
海は布団から両手を出し、頭を触る。

（鏡を見たわけじゃないから断言は出来ないけど、多分髪も切られてない。服もきちんと着ている。……こいつら、本当になにもしなかったのか？）

海の中で、それはあり得ないことだった。
家にいれば必ずなんらかの暴力を受けた。

それが当たり前であり、それが日常だった。

……しかし、今日は違った。

なにもされた形跡はなく、それどころか一緒に布団で寝ていて。

（やっぱりこいつらは違う……。態度もそうだし、なにより目が違う）

今まで海が接してきた大人達に比べて、この二人の目は輝きが違った。宿っているものが違った。

それはそうだろう。

邪魔者として見ている者と、大切な家族として見ている者。
海を見る目に浮かぶ色が違って当然だ。

子供は、感受性がとても高い。

海はそれが特に高かった。だから違いが明確にわかるのだ。

――が。

（……それでもやっぱり信じられない。まだ初日。必ずどこかでぼろが出るはずだ）

それがわかった今でもなお、海が出した答えは昨日と一緒にだった。

ここにいと、目覚めた輝達から暴力を受けるかもしれない。そう考えた海は、移動することにした。

リビングにでも行こうかなと、上半身を静かに起こし、そのまま立ち上がるうとしたところで――

「どうしたの海？」

「――っ!？」

――かかった声に固まった。

さつき海が顔を見た時、声の主――雫は確かに眠っていた。

睡眠を妨害した覚えはないし、上半身を起こした時も彼女に触れた覚えはない。

それなのに彼女はまるで計ったかのようなタイミングで海に声をかけてきて。

（寝たふりをしていた……？いや、そんなことをしてもなんのメリットもないし、第一、起きていたら俺は必ず気づく。……たまたま、か）

そう自己完結（実際その通りなのだが）させた海は、雫の方へと視線を一度だけ向け、すぐに逸らし言う。

「……別になんでもない」

先ほどと変わらない体勢の雫。

違いは口元に浮かんだ微笑みと、開いている瞳。

たったそれだけ。

たったそれだけなのに、大きく変わった彼女の雰囲気。
それに海は戸惑っていた。

（なんで……なんでこいつの目を見ると、こんなにも泣きたくなるんだ……？なんなんだ？この暖かい気持ちは？）

寝ている時にも出ていた優しい雰囲気。それが彼女が目を覚ました瞬間からさらに強くなっている。

優しい雰囲気。優しい微笑み。優しい瞳。

自分には決して向けられないものと諦めていた優しき。それを彼女は昨日と変わらず向けてくれていて。

その事実を再確認して、海は無性に泣きたくなった。

そんな海の内心をきちんと理解した雫は偶然に感謝していた。

（目が覚めてよかった。危うく、またこの子を一人にしてしまうところだった）

雫は海と同じように上半身を起こし言う。

「おトイレ？それなら一緒に行くわよ？」

「……違う」

なるべく雫の目を、顔を見ないように顔を逸らしながら海は答える。

居心地が悪くて仕方なかった。

今まで自分にはなかったもの。諦めていたもの。
それを、なんのメリットもないのに向けてくる雫。

戸惑う。困る。

どうしたらいいかわらない。この雰囲気に対する答えを、海は持っていないから。

「じゃあどうしたの？うちの起床時間は一応六時なんだけど」

そう言い、雫は枕元にある目覚まし時計に目をやる。

「まだ五時。あと一時間もあるわよ。もう一度寝ましょ？」

優しい微笑みを浮かべながら、優しく海の頭を撫でる雫。

そんな彼女の言動に、海は迷う。

素直に言ってもいいのだろうか？

自分の思いを言っても、この人は怒らないだろうか？

そんな考えが海の脳裏をよぎる。

心に刻まれた傷がそう簡単に治らないのと一緒に、心に刻まれた恐怖も、そう簡単には癒えない。

海は自分の意見を言ったら殴られるのではないかと、恐れていた。

言葉に詰まる海。そんな海の頭を、雫は優しく撫でながら言う。

「眠れないの？」

優しい声。優しい手。そして、優しい笑顔。

それらを見て、海の心はまた、暖くなる。無性に泣きたくなる。

海はそんな自分の感情に戸惑いながら、それらがこぼれないように己の手を思い切り握り締める。

よほど力が入っているのか、握り締めた拳は白くなっていた。

(……一回だけ。一回だけ言って、それで駄目だったら、その時は心を閉ざそう)

思い通りにコントロール出来ない自分の感情。自分の心に生まれる、暖かい『なにか』。

理解出来ないもの。知らない感情。

それらに包まれていると、ありもしない幻想を期待してしまいそ

うで。

諦めた未来を望んでしまいそうで……。

だから海は一つの決断をすることにした。

決意を秘めた目を雲に向け、しかし躊躇いながら、海は口を開く。

「……俺……いつも起きるの、この時間だったから。だから……眠れない」

海の心臓は高鳴っていた。

昨日の海の言動は、今まで慣れ親しんだ歪んだ日常を作ろうとしてのものだ。

いつものことだった。

だからどんなことを言っても、緊張なんてしなかった。肩車された時や、一緒に風呂に入った時に鼓動は速くなったが、それ以外はいたって平然としていた。

そんな海が、今とても緊張し、鼓動も速くなっている。

理由は、期待してしまっているからだ。

もしかしたら彼女なら、と。

あり得ないと理解しながらも、もしかしたら、と。

諦めながら夢見る希望。

ないと理解しながらも望む未来。

それを、もしかしたらこの人は、この人達なら与えてくれるのではないか、そう期待して。

……また、やっぱりこの大人達も、と絶望を恐れて。

受け入れるか、殴られるか。
どという反応を示すのかと、海の心臓は高鳴っていた。

海の視線を、言葉を受け、雫は驚き、そして理解した。

怯えた彼の視線と、日の出とほぼ同時刻には目覚めるという事実。
そこから導き出される答えは、一つだった。

（この子は寝る時間まで……）

一日二十四時間。そのうち、海の心が休まる時間がどれほどあっただろうか？

朝は暴力を受けないように誰よりも早く目を覚まし。

食事も満足に与えられず。

行きたくない学校に無理矢理通わされ、そこでも孤独を痛感し。

家に帰ってもどこにも居場所などなく。

一番遅くに風呂に入り、暴力に怯えながら眠りにつく。

それが海の日であり日常だ。

悲しく歪んだ世界。

雫は昨日から、海その日常の一端を垣間見てきた。

まだ全部を見たわけではないが、それでもわかる。

海に心休まる時間など、一秒たりともなかったことを。

雫は海に見えないように拳を握り締め、こぼれそうになる涙をなんとか抑える。

海は同情されることなど望んでいない。それに同情するだけで終わりにしたくない。雫はそう思った。

それに、海の体験したことを想像することしか出来ない自分がわかったような口を聞いても、海には届かない気がしたから。

だから雫は同情しない。かわいそうだと思わない。

その代わり、精一杯愛そうと心に決めた。

不安そうに自分の顔を見上げる海に、雫は笑顔を向け、彼の頭を

優しく撫でる。

「じゃあ私とお話していきましょうか？」

雫のその言葉に、海は目を見開く。

(本当に……受け入れてくれた……？)

信じられなかった。

もしかしたら、と希望を抱いてはいたが、半分以上は諦めていた。

自分を受け入れてくれる人がいるわけない。「ふざけないで従え」と、いつものように強要されると海は思っていた。

……だから、海は素直に受け入れられない。信じられない。

これも自分をより傷つけるための『手』だと、警戒心からくる『被害妄想』が自然と浮かぶ。

(……そうだ。まだ二日目だ。答えを出すにはまだ早い)

結局、海の出した結論は先送りだった。

理由は――怖いから。

もしここで『受け入れてくれる』と結論を出し、自分をさらけ出して。

そうやって信じて、もし、裏切られたら？

心を閉ざした上で振るわれる暴力には耐えられる。いつものことだ。

だけど、心を開いて暴力を受けたら？

答えは火を見るより明らかだった。

人を信じられなくなった海が、初めて信じようと思った人。その人に、彼らに裏切られた時、間違いなく海は傷つく。

そうなったら、今度こそ海の心は完全に壊れるだろう。

海はそれが、これ以上傷つくのが嫌だった。怖かった。

そのことを本人は意識していない。

今まで裏切られ続けた心が無意識に張った、防衛本能だから。

海は、今回は雫の提案に乗ることにした。
ここで抵抗しても無意味だし、話すことで内心を探ろうとしたのだ。

海は雫の顔を見ないようにして「うん……」と頷く。

「じゃありビングに行きましょうか。ここで話していると輝さんが起きちゃうから」

海の頭を撫でながらそう言った雫。

それを聞いて、海はやっぱりな、と思った。やっぱり自分がいると邪魔なのだと。

海のそんな内心を悟った雫が言う。

「違うわよ。海。あなたは邪魔なんかじゃないわ。今邪魔なのは、輝さん」

「……へ？」

理解出来ない内容に、海は声をあげる。

そんな海に、雫は片目をつぶって見せ、楽しそうに言った。

「輝さんに、私と海の二人きりの時間を邪魔されたくないの。だから移動するのよ」

「……」

昨日に続き、二人の力関係を理解した瞬間だった。

先にベッドから出た雫に、昨日買ってもらった青色の柔らかいスリッパを履かせてもらい、手を繋いでリビングに向かう。

暖かく柔らかい雫の手。
優しく柔らかい笑顔。

それに触れていると、向けられていると、海はやはり泣きたくない。
った。

だから海はなるべく雫の方を見ないようにしながら歩いた。

「あ、そうだね。海」

そんな海に、声がかかった。

本当なら雫の顔を見たくはなかったのだが、足を止め、彼が顔をあげるまで口を開こうとしない雫に、海は渋々顔を上へあげた。

なるべく彼女の目を見ないようにしながら、海は言う。

「……なに？」

「おはよう。海」

「——っ」

当然のように言われた朝の挨拶。

今まで一度もかけられたことがないそれに驚き、海は今度こそ雫の目を見た。

自分の目を見つめる優しい瞳。優しい微笑み。

見とれてしまう、美しい笑顔。

——昨日。

海が家に入る時雫の顔から目が放せなくなったように、今もまた、彼女から目が放せなかった。

固まる海の鼻を、雫は昨日と同じようにつまむ。

「海。お返事は？」

どこまでも優しい笑顔。

それをずっと見ていたくて。見ていたくなくて。

海は雫の鼻をつまむ手を払い、視線を彼女から逸らしながら、小さい声で言った。

「……お、おはよう」

それはまるで蚊の鳴くような声だった。
しかし、確かに雫には届いた。

雫は嬉しそうに笑い、もう一度「おはよう」と言い、再び海の手を引きリビングへと向かい歩き出す。

海の胸には、再び、あの『暖かい』なにかが宿っていた。

リビングに着き、昨日と同じ席に海を抱き上げ座らせ、雫はキツチンへと向かう。

冷蔵庫から牛乳を取り出し、鍋に入れ温める雫。

彼女のそんな後ろ姿を横目で見て、海はまた、泣きなくなった。

(……なんなんだよ、いつたい……)

なんでこんな気持ちになるのか、泣きたくなくなるのかわからなくて、海は机に肘をつき頭を抱える。

(俺はどうしたいんだ？どうされたいんだ？)

考えても出ない答えに苛立ちと苦しみだけが募っていく。

「はい。海。どうぞ」

そうやって苦しんでいる海に、雫が温めた牛乳を差し出す。

かけられた声にはっとし、海は顔をあげる。

そこにあった水色のマグカップと雫の優しい笑顔。

それを見てやっぱり泣きなくなった海は、それ以上彼女の顔を見ないように、考えないようにした。

小さい声で「ありがとう」と雫に告げ、海はマグカップを受け取る。

湯気の出ている牛乳が入った、温かいマグカップ。

それを両手で包むように握り、海はそれを一口口に入れた。

温かい牛乳が体を温める。心を温める。

今まで感じていた苛立ちと苦しみがスッと溶けていくような感覚を初めて感じ、海は戸惑った。

ただの温めた牛乳が、こんなにも落ち着ける飲み物だともいかなかったのだ。

「美味しい？」

海の隣に座り、海に笑顔を向ける雫。
そんな彼女に、海は無言で頷いた。

——一時間後、リビングで話す二人を見て、輝が嫉妬したのは、
また別のお話し。

「海！帰ったら絶対一緒に遊ぼうね！」

「輝さん。もうその台詞、何回目ですか？いい加減海も呆れていますよ」

雫の言葉通り、海は呆れていた。

約二時間前、近藤家の定時通りに起きてきた輝は、リビングに入るなり発狂した。

これは比喻でもなんでもない。本当に発狂したのだ。

楽しそうに話す二人の姿（海はほそぼそと無表情で話していたのだが、輝にはそう見えた）を見て、輝は叫んだ。

抜け駆けだとか、ずるいだとか。

そういうことを無秩序に叫ぶ輝を止めたのは、雫だった。

ただ一言。

笑顔で「黙れ」と言っただけで、発狂していた輝は黙った。

その時輝が青ざめて震えていた様子を見た海は、雫にはなるべく

逆らわないようにしようと心に決めたのだ。

そうやって数分間、黙って用意された朝食を食べていた輝だったが、やがて立ち直り、海に切り出した。

「雫とだけ仲良くするのはずるいから、仕事から帰ってきたら一緒に遊ぼう」と。

仲良くしていた覚えのない海はあっさりと断った。

そのまま朝食として出された苺ジャムがたっぷり塗られた食パンをかじる。

——が、もちろん輝は納得しなかった。

「なぜだい！？どいしてだい！？僕は除け者かい！？ずるいじゃないかー！」

声を大にし、身を乗り出し海の手をつかむ。

彼の瞳には涙まで浮かんでいて。

海は驚いた。

今まで邪魔者扱いしかされなかった自分に、一緒の時間を取りたいと懇願される日がくるなど思いもしなかったから。

「どうしてだい！？どうしてなんだい！？」

固まる海の手を握りながら、輝は半泣きで続ける。

驚きためにフリーズしていた海だが、大人の男が半泣きになりながら自分の手を握っているという事態に、だんだんイライラしてきた。

（なんだこいつ？頭悪いんじゃないのか？）

海の目が冷たくなって、迷惑だというオーラが出ているのにも関わらず、輝は手を離さない。

いや、そもそも海のそれらが見えていないのだ。

（なんだっけ？たしかこういう奴にぴったりの言葉があったような……）

過去言われた言葉の中から、今の輝を示す単語を探す海。

ほどなくして、それは見つかった。

輝の目を見据え、言い放つ。

「あんだ。うざい」

その時、まるで雷に打たれたような衝撃を受けた。理由はもちろん、愛息子の言葉だ。

輝は冷たい視線の海から逃げるように立ち上がり、ふらふらとした足取りでリビングの隅へと向かう。そしてそのまま座り込み、膝を抱えた。

この日から、輝がリビングの隅で膝を抱えるのが日常となったのは、また別の逸話。

——そんな喜劇から立ち直った輝は、懲りた様子もなく海に「遊ぼう」と迫り。

それから二時間、それはこうして輝が仕事に行く時間になる今まで続いた。

これは海でなくとも呆れるだろう。

「呆れられてもいいのさ！それでも僕は海と遊びたいんだよ！」
(……アホだこいつ)

輝の叫びに、海は心の底から呆れた。

海がそうやって冷めた視線を送っているのにも関わらず、依然として輝は止まらず。

そうやって続く暴走を止めたのは、彼女だった。

「……輝さん」

ただ名前を呼んだだけだった。顔は笑顔だった。

それなのに……輝も、そして海も、背筋が凍った。

海に向けていた視線を、ゆっくりと、首ごと、ギギギと音を立てて零に向ける。

彼女の笑顔を見て、輝の額から冷や汗が流れ出す。

海は見れなかった。

彼女の方を見たらいけないと、培った防衛本能が激しく警鐘を鳴らしていたのだ。

そんな恐怖の対象は、そのままの笑顔で輝に言う。

「海が呆れてるの、わかりますよね、輝さん？」

「……はい……」

「息子が出来て嬉しいのはわかりますけど、ちょっと暴走しすぎじゃないですか？」

「……はい。おっしゃる通りです……」

輝の返答に、雫は満足したように頷く。

「じゃあこれからは控えてください。わかりましたか？」

「……わかりました……」

「よろしい」

そう雫が笑った時、彼女から発せられていたプレッシャーは霧散した。

それと同時に輝の体から力が抜ける。

スーツが皺になるのにも構わず、輝はリビングの床に膝をついた。そんな輝の姿を、海は情けないとは思わなかった。

あのプレッシャーの中でよくも会話が出来たものだ、むしろ感心したくらいだ。

雫はリビングのかけ時計を見て、輝に言う。

「輝さん。そろそろ出ないと遅刻してしまいますよ」

「ん。そうか」

雫の言葉に、輝は彼女と同じようにかけ時計を見る。

確かに家を出る時間になっていたのを確認した輝は立ち上がり、スーツを整え、海の頭に手を乗せ、言う。

「それじゃあ海。行ってくるね」

先ほどの壊れっぷりが嘘のように大人の対応を見せる輝。

雫の方を窺い見ると、彼女もあの優しい空気をまとっていて。

（……変な大人）

別人のように雰囲気が変わっているというのに、自分に実害が今のところはないということとでそのように割り切れる海は、達観しているというか、ある意味大物だった。

むろんそれは、昨日一日彼らのことを『観た』上での判断だ。

この二人なら、こういう一面があってもおかしくない、そう海は、二人のことを認識していた。

「海」

輝の言葉になにも返さない海に、雫は言う。

「輝さんに『行ってらっしゃい』って言わなきゃ」

「え……？」

求められたものが、海は理解出来なかった。

今まで空気のように、もしくは邪魔者扱いしかされてこなかった海。

当然『行つてらっしゃい』も『お帰り』も言われことがなかったし、海も言ったことがなかった。

だから自分がなにを求められたのか、海は理解出来なかったのだ。

輝はしゃがみ、海と視線の高さを合わせ言う。

「海。行つてきます」

「え……？あ、え……？」

視線を右へ左へ。戸惑いを隠せない海。

海はしたことがないが、引き取られた家の家族達がそうするところを見ていたので、ここまでされればどうすればいいのかはわかる。わかるが、自分が『それ』を言う姿を想像出来なかったし、なにより恥ずかしかった。

そんな理由から、なかなか返事をする事が出来ない海。輝も雫も、そんな海になにも言わず、彼の返事を待った。

十秒。二十秒と沈黙が時を刻み。そうして一分が過ぎようとした時だった。

「……………行つて、らっしゃい……………」

ぼそぼそと、あまり口を開かずに言つた小さな挨拶。
不慣れな、物心ついて初めてする挨拶に、海の顔は真っ赤だった。

それを聞いて、見て、輝も雫も嬉しそくに笑つた。

海を両手できつく抱きしめ、言う。

「行つてくるよ！ My Son！」

「や、やめろ！抱きしめるな！暑苦しいんだよ！」

「あははっ！海は可愛いなあ！」

「やめろつて、言つてるだろ！離せ馬鹿！」

「あははは！馬鹿だから海の言つてる意味がわからないよ」

「——っ！わかつてるからそういう言葉が出てくるんだろっが！」

「あら。海は頭がいいわね」

「うん！将来がとても楽しみだよ！」

「あら。輝さんたら」

照れ、頬を赤くさせている海の言葉など気にしもせず、輝と雫は
勝手に盛り上がる。

海を抱き上げ嬉しそくに笑う輝。

そんな輝を見て、口元に手を添え上品に笑う雫。

そんな話を聞かない夫婦に、ついに海はキレた。

「話を聞けって言ってるだろうが！この馬鹿共がー！」

自分の親に向けるようなものではない暴言。

けどそれが照れからくるものだ、輝も雫もきちんとわかっていった。

だから二人は怒らない。

むしろ愛息子が照れているという事実喜びを感じていた。

——自分の意見が無視される。

今まで体験してきたことと、なにより一つ変わらないのに、どうしてもこんなに感じが違うのか、海は不思議で仕方なかった。

ただ挨拶をしたただけなのに、なぜこんな暖かい気持ちになるのか、海は理解出来なかった。

今までと全てが違う家。大人。生活。

それらに戸惑いながら、警戒しながら、海の近藤家での新しい一日が、こうして始まった。

「それじゃあ海。着替えてお勉強をしましょうか」

玄関まで海の手を引き、彼と一緒に輝を見送った雫は、家に入るなり海にそう切り出した。

雫の顔を見上げながら、海は聞く。

「着替えるのか？この服は？」

海が今着ているのは、昨日雫達買ったネイビー色のパジャマ。下は全てネイビーだが、上はネイビーとホワイトのボーダーで、正面でボタンを留めるタイプのものだ。

今までの家ではお古の、しかもボロしか貰えなかった海にとって、これは充分私服に出来るものであり、着替える必要があるのか疑問だった。

雫は言う。

「それはパジャマですもの。パジャマは、基本的には寝る時に着るお洋服なの。だから、例えば家の中にいてもうちでは着替えてもらう

わ。それに……」
「それに？」

言葉を止めた雫に、海は問う。
そんな彼に雫は満面の笑みを向けた。

「それに、海がいろいろな服を着るところを見たいのよ」
「……」

ものすごくいい笑顔の雫に、海は言葉を返せなかった。
なんとなく、断ったら『酷い』ことになりそうな予感がしたのだ。

「さあ、海。お着替えしましょうねー」
「……」

海が自分のこの判断が間違いではないと気づくのは、当分先のお話。

「それじゃあ、今日のお勉強はこの辺にしておきましょうか」
「……もう、終わり？」

雫の言葉に、海は物足りない反応を返す。

輝を見送り、雫に着替え『させられた』あと、海は雫に勉強を教わっていた。

昨日、デパートで買ったノートとシャープペンシルなどの筆記用具。そして、どこからか雫が持ってきた小学校の教科書。

それらをリビングの食卓（ソファアが置いてあるところにも机はあるのだが、海の身長だと柔らかすぎるソファアに埋もれてしまうので、こちらを選択した）に広げ、定位置になった席に座り勉強を始める。

この日、雫が選んだ教科は、算数に国語、それに社会だった。

小学校と同じようにきちんと時間で区切り、休憩を挟みながらの個人授業。

間違ったり詰まったりしたら怒られないか、と警戒していた海だったが、雫のわかり易い解説と、問題を解く度到大袈裟なくらい褒める飴で、すぐにこの時間が楽しくなっていた。

今まで、海のことを誰も見ようとはしなかった。

テストでいかにいい点をとろうと、体育でいかに優れた結果を残そうと、数人の教師が軽く褒めるくらいで、誰も海のことを褒めなかった。

それどころか、引き取られた家の子供よりもいい結果を残すと、それだけで殴られた。

だから海は努力することをやめた。

授業も聞き流すようになり、体育などの授業も適当にこなした。

そんな海だから、自分を見てもらえることが、なにより、遠慮せず知識を得られることが楽しくて仕方なかった。

だから不満だった。

もつと、もつと新しい知識が欲しかった。

そんな海の頭を優しく撫でながら、雫は言う。

「もうお昼の時間だからね。それに、一気に根を詰めてやるより、少しずつやっていった方が効率もいいの。また明日、一緒にお勉強をしましょう」

「……わかった」

納得したわけではないが、教師役の雫が終わりにしようと言っているのだから、海は頷くしかなかった。

それに、お腹が空いているのも確かだから。

（あとで今日のところをもう一回やっておこう）

今の海は、自分で新しい知識を学ぶことが出来ない。

応用する力がないため、教科書を進めることが出来ないのだ。

しかし、習ったところをもう一度繰り返し、自分の知識にすることは出来る。

海は今日の予定に復習を盛り込むことで、この件は終わらせることにした。

机の上を片付け、雫は言う。

「それじゃあ海。お昼ご飯を食べに行きましょう」

「……出かけるの？」

海は首を傾げる。

昨日も外食をし、今日も外食をするということに驚いたのだ。

今までの家では（もちろん海は連れて行ってもらったことはないが）外食は多くても一週間に一回だった。

だから二日連続で外食に行くということに海は驚いたのだ。

そんな海を気にすることなく、雫は続ける。

「ええ。近くに美味しい和食屋さんがあるの。お散歩も兼ねて出かけましょう」

「……出かける時はこの格好でいいの？」

決定済みのことのようなので、海は疑問を挟むのはやめた。その代わり、他の疑問をぶつける。

今海が着ているのは、英字が胸の位置に大きくプリントされた、薄緑の半袖のＴシャツに濃い緑の長袖のカーディガン。灰色のデニムパンツ。

全て雫が朝選んだ洋服だ。

今まではパジャマが私服のようなものだった海にとって、ＴＰＯに合った服の区別はつかなかった。

パジャマからこの服に着替えたように、出かける時にも着替えるのかと海は思ったのだ。

雫は言う。

「ええ。その格好でいいわよ。それとも他の服を着たい？」

雫の問いに、海は首を横に振る。

先のような理由で、海は服の良し悪しの判別がつかない。
だから着替えなくていいのなら、それでよかった。

「じゃあ行きましょうか」

そんな海に雫は笑いながら手を差し出す。

海は少しの躊躇のあと、椅子から飛び降り、その手を握った。

「じいよ」

近藤家から徒歩二十分。

駅前の、今では珍しく活気のある商店街を抜けた閑静な住宅街に、それはあった。

横長の蔵のような二階建ての和式建物。

歴史を感じさせる少し灰色の混じった白色の壁に、黒い瓦屋根。

入り口まで敷かれた砂利の中に浮かぶ足場としての石。

その脇を固める、季節の花々と気持ちのいい新緑。

客席に設けられた大きな窓は上半分が障子で隠され、人目を気にすることなく食事を楽しむことが出来る工夫が施されていた。

ここ、和風レストラン『工藤』は、周りの民家から浮くことなく、しかし埋もれることもなく、その存在を示していた。

海は目の前のこの建物に圧倒されていた。

今まで引き取られた家の中にも和式の家はあったが、ここまで本格的で存在感のある家は見たことがなかったのだ。

口を開けて呆ける海の姿に、雫はクスリと笑い、彼の鼻をつまみ正気に戻す。

「さあ、海。入りましょう」
「……うん」

本当に自分が入っていいのだろうかと不安になっていた海だが、雫に促されるがままに彼女に手を引かれ、砂利道を歩き店内へと入った。

「いらっしやませー」

木製の開き戸を押し、薄暗い店内に入るなりかかる声。

明るい、だがどこか間の抜けた声。それを聞いた雫は笑顔を浮かべた。

「こんにちは。圭ちゃん」
「あらー雫ちゃん。いらっしやーい。……あらあー」

声の主は、店の制服である茶色の甚平^{じんぺい}を身にまとったこの店の店主の妻、工藤^{くどう}圭^{けい}だった。

黒髪をショートボブにし、実年齢よりも十歳は若く見られる童顔と間延びする話し方が特徴の女性で、雫とは数年代の付き合いになる。

二人は呼び名でわかるように、ただの店員と客以上の付き合いを、友人としての付き合いをしていた。

いつものように雫に挨拶をした圭だったが、雫と手を繋ぎこちらを窺い見ている海に気づき、足を曲げ彼と視線を合わせる。

「こんにちはー。あなたは？」

「え……？」

いきなり話しかけられ海は戸惑う。

どうしたらいいのかわからず、海は助けを求めるように、雫を見上げた。

そんな視線を受け、雫は圭と同じようにしゃがみ、海の頭を撫でながら圭に向け言う。

「この子は私の息子。海よ」

「ああー。この子が」

海を養子にすることを事前に聞いていた圭は納得し、一人事態についてこれない海に向け笑顔に向けた。

「初めましてー。私は工藤圭。このお店の女将なんてしてまーす。よろしくねー」

「……」

彼女に対する対応がわからない海は、再度雫を見る。雫はそんな海の手を握り、彼の目を見ながら告げた。

「海。誰かにご挨拶をされたら、きちんと挨拶し返さなきゃ駄目よ」
「あい、さつ……?」

要領を得ない海に、雫は頷く。

「そう。朝だったらおはようございます、お昼だったらこんにちは、夜だったらこんばんは、って。初めて会った人には名前を言って、よろしく願いしますって挨拶をするの。やってみて」

優しいが、真剣な瞳の雫を見て、にこにこ笑顔を浮かべている圭を見て。そうやってもう一度雫を見て、海は俯く。

輝に「行ってらっしゃい」を言った時と同じように、海はやり慣

れていない行為に戸惑い、照れていた。

自分がそういう行為をする姿を想像出来ないのだ。

だから海は切り出すことが出来ない。

人間誰しも、慣れている行為には自信を持ち進んで動くが、やり慣れていない行為には途端に臆病になる。

日本人はその傾向が特に強い（全員がそうとは言わないが）。

見知らぬ大人相手に堂々と毒を吐ける海だったが、それに比べて遥かにハードルの低いただの挨拶は、なかなかその口から出ることはなかった。

雫も圭も、海を急かすことはしない。二人とも海が自発的に挨拶をすることを待っているのだ。

そんな二人の考えを知らない海は、頭を悩ませていた。

（なんだこれ……？ 新手のいじめか？）

内心を探り、悪意のないことは確認済みだが、その意図まではわからなかった。

（すぐに暴力に訴える大人も嫌いだけど、こいつらみたいにはわかり

にくい大人も嫌いだ)

非難の視線を二人に向けるが、返ってくるのは優しい笑顔と、ここにこした笑顔だった。

(っっていうかいいのかこいつ？他の客の相手しなくて)

昼時なのと、それなりに知られている店だということもあり、さつきから引つ切りなしに人が出入りをしている。

出て行く客は会計を済ませるだけの一工程だが、入ってくる客はそうではない。

何名か聞き、席まで案内をするなどの複数の接客をしなくてはいけないのだ。

その対応を圭はさつきから他の店員に任せっきりにしている。そのことに關して、海はいいのだろうかと疑問に思っていた。

明らかに忙しい店内。そんな中、こうして仕事をしない女将。そしてそれを注意しないどころか嫌な顔一つしない他の店員。

昨日、初めて外食をした海にとって、飲食店の常識などあるわけがない。

こんな店もあるんだな、と間違った認識をしてしまっても、それは仕方のないことだ。

——閑話休題。

そうやって二人が諦めるか助け舟を出すのを待っていた海だが、それが一向にやってくる気配もないので、彼は腹をくくることがした。

俯いたまま圭の方に顔を向け、小さな声で話す。

「……海。……よろしく」

なにを言つか迷ったあげく、海が口にしたのはそのたった一言だった。

しかし、それを聞いた圭はとても嬉しそうに笑う。

「はい。よろしくねー、海君」

そう言って海の頭を優しく撫でる圭。

海が顔を雫の方に向けると彼女も満足そうに微笑んでいて。

（……変な大人がまた増えた）

そんな二人の姿を見て、海はそう思ったのだ。

「海。ケーキを買って帰りましょう」

「ケーキ……？」

工藤で昼食を済ませ（本格的な和食というものに、海の箸は始終止まることがなかった）店を出るなり、雫は海にそう笑いながら言った。

彼女の言葉に海は眉を寄せる。

海はこのまま帰ると思っていたし、彼にとってケーキというのは特別な日に食べるものであり（もっとも海は食べたことはなかったのだが）今がそれにあたるとは思わなかったからだ。

そんな海の内心を気にとめず、雫は海の手を引き、賑わいを見せる商店街へと歩を進める。

「今から行くケーキ屋さんはシユクレっていう名前なんだけど、シユークリームがとても美味しいの。海もきつと気に入るわ」

そう語る雫の表情は、とても嬉しそうで。

本当にそのケーキが好きなんだと、海にも伝わってきた。

だが、と海は思う。

好きなのは伝わってきたが、なぜ買うのかの理由は、やっぱりわからない。

それなので、海は直接雫に聞くことにした。

雫の横を歩きながら、彼女の顔を見上げ口を開く。

「……ねえ」

「ん？なあに？」

海に声をかけられ、雫は笑顔を海に向ける。

その笑顔が再び胸をざわつかせるが、海はそれを黙殺し、しかし視線を逸らし続けた。

「なんで、ケーキを買って帰るの？」

「あら？ケーキは嫌いだった？」

海の言葉の『本当の意味』を雫は理解していたが、あえて勘違いしたふりをし、足を止め海に尋ねる。

それに海は、首を横に振りながら答える。

「食べたことないからわからない……。そうじゃなくて、今日は別に特別な日じゃないだろ？それなのになんでケーキを買って帰るの？」

海の言葉は雫の想像通りだった。

満足に食事を与えられなかった海に、ケーキなどの嗜好品をわざわざ与えるわけがない。

雫はそれに気づいていた。気づきながらあえて気づかないふりをしたのは、海に同情していると思われなくなかったからだ。

与えるのは等身大の愛情だけでいい。
そこに同情はよけいなものいららない。

雫はそう考えていた。

海の言葉の前半部を聞き流し、雫は後半部だけに返答をする。

「特別なことがなくてもケーキは食べていいのよ。でも、そうね。あえて理由をつけるとしたら」

雫は言葉を止め、しゃがみ、海と目の高さを合わせ、微笑みなが

ら言う。

「海と一緒に美味しいケーキを食べたくなった。それが理由かしら」
「……」

自分の頭を優しく撫でながら笑顔を向けてくる雫のことを、海は不思議そうに見ていた。

（特別な理由がないのにケーキを食べる？俺と一緒に食べたい？……こいつはいつたいたいなにを言ってるんだ？）

雫の言葉の内容を、海は全く理解出来ない。

それはそうだろう。

人間というものは、自分の知っている『世界』とは違うものを簡単に受け入れることは出来ない。

そして、それ以前に海の『世界』は狭すぎた。

……なんでもない日に家族でケーキを食べるといふ、ありふれた風景に疑問を挟むくらいに。

雫は思う。海の狭い世界を、母親として広げてあげたいと。

（この子は、もつといろいろな世界を知るべきだ。今まで海が体験してきた、悲しい世界だけが全てじゃないってことを教えてあげたい）

雫はいまだに眉を寄せている海の頭を撫で、立ち入り再び彼の手を取った。

「さあ海。行きましょう」

促され、海は頷く。

納得したわけでも答えが出たわけでもないが、とりあえず保留にしておくことにした。

それよりも、今まで一度も食べたことがない、しかし食べたいと夢見ていたケーキを買ってもらえることに海は興奮していた。

いくら未来を諦めたと、自分の人生に絶望したといえ、彼はまだ七歳。

ふとしたことで年相応の感情が顔を出す。今がまさにそれだった。

本人の意思とは無関係に速まる足。

垣間見えた少年の行動に、雫は目を細めていた。

「ただいま海！いい子にしてたかい？そんな海にはこれをあげよう！」

海がリビングのソファーに座りテレビを見せさせられている（海としては勉強をしたかったのだが、雫に誘われ、仕方なく見ていた）と、仕事を終え帰宅した輝が一直線に海の元へ行き、テンション高くそう叫び、手に持っていた紙袋を海へと差し出す。

いきなり現れた輝のあまりのテンションの高さについていけず固まっている海。

そんな海の姿を見てどう勘違いしたのか、輝は嬉しそうに叫んだ。

「僕から目を逸らさないなんて……！そんなに僕がいなくて寂しかったんだね！僕は帰ったよ！さあ！僕の胸に飛び込んでおいで、My Son！」

両腕を広げ、いい笑顔を浮かべる輝。

海はそんな輝に怯え、表情を歪めながら、無意識に隣に座っている雫の方へと体を寄せる。

海は否定するだろうが、今日ずっと雫と一緒にいた（比喻ではない。雫はずっと海の側から離れなかった）ことで、彼女に心を、もちろん全てではないが、許した。
これはその表れだった。

雫はそんな息子の坑道行動に表情を緩める。
そして考えた。

夫の喜びと、息子の怯え。どちらを優先するかを。

—— 答えを出すのに、一秒もかからなかった。

海のが体を抱きしめ、輝に非難の視線を送る。

「輝さん。海が怯えています。少し落ち着いてください」

雫は『母』を、つまり海の感情の方を優先した。

「怯え……？海が？どうしてだい？」

「輝さんのテンションが異様に高いからです」

怪訝な表情を浮かべ、全く意を得ない輝に、雫は事実を淡々と伝える。

だが、それでも輝は理解出来なかった。

首を傾げながら雫に言う。

「確かに普段よりは高いかもしれないけど、怯えるほどじゃあ……」

「怯えているんです。落ち着いてください」

「……はい」

有無を言わさない雫の怖い微笑みに、輝はようやくその口を閉じた。

落ち着いた輝を確認してから、雫は海に優しく笑いかける。

「海。もう大丈夫よ」

「………ありがとう」

雫の顔を見ないまま言った海の感謝の言葉。

それを聞き雫は嬉しそうに笑い、海を抱きしめる力を、少し、強くした。

「……なんだか、二人ともとっても仲良くなっていないかい……？」

「——っ！そんなこと……」

「はい。もちろんです。今日一日、ずっと一緒にいましたから」

輝の言葉に、頬を赤く染め反論をしようとする海。

しかし、そんな海のことを抱きしめながら言った雫の言葉が、それを遮る。

「一緒にお勉強もしましたし、工藤にご飯も食べに行きましたし。それに、帰りにシユクレでケーキを買って、一緒に食べたりしましたから。あ、輝さんの分もありますから、食べていいですよ」

嬉々と語る雫。

あまりにも自分をないがしろにした妻の物言いに、流石の輝も非難の声を――

「ずるい！」

――あげることはなかった。

「ずるい！僕も海と仲良くなりたいよ！！」

急激に縮まった（海はそうは思っていないのだが）妻と息子の距離に嫉妬し、発狂する。

「僕も海と一緒にご飯食べたり、出かけたりしたいよ！決めた！今

決めた！休む！明日からしばらく仕事休む！！」

地団駄を踏みながら、子供のように駄々をこねる輝。

そんな輝を止めたのは、やはり彼女だった。

「輝さん」

それは朝と同じ、静かな声だった。しかし、やはり威圧感が満載で。

名を呼ばただけなのに、輝はもちろん、海まで動けなくなる。

冷や汗をたらしながら、輝は視線だけを、ゆっくりと雫に向ける。

そこにいた雫を見て、輝は息をのんだ。

（ひいひいっ！！ま、魔王モードに入ってるーっ！？）

基本的に、彼女は温厚だ。

そして、古来より温厚な人間ほど怒った時は怖いと相場が決まっている。

雫は、その見本のような存在だった。

雫が怒り出すレベルは、一般の人が『キレる』レベルからだ。そこまでは注意こそすれ、怒ることは決してない。

それゆえ、雫が怒るととても怖い。

そんな雫の怒りには、三つのレベルがある。

一番下の、笑顔で怒る堕天使モード。

真ん中の、表情がなくなる般若モード。

そして、一番上、いつもの雫からは考えられない、冷たい目と嘲笑を浮かべる魔王モード。

輝はなによりも、この魔王モード時の雫を恐れていた。

魔王は言う。

「今、仕事を休むとか聞こえたんですけど、聞き間違えかしら？」
「も、もちろん間違いですっ！！」

背筋を伸ばし、指先までしっかり伸ばした直立不動の体勢で輝は答える。

「そう？そうよね」

にっこりと、しかし瞳も口元も一切笑っていない雫の笑顔に、輝の背中を冷たい汗が伝う。

雫に抱きしめられている海は、間近から発せられている、今まで感じたことのない『鬼気』が自分に向けられないように（もつとも、雫はそれを海に向けるつもりなど、微塵もなかったのだが）身じろぎ一つしなかった。

雫は続ける。

「人の命を預かる外科医、しかも院長先生からの信頼も厚い近藤輝ともあるうお方が、そんなこと口にするわけないよねー」

「あ、当たり前じゃあないか……」

なんとか雫の機嫌を直そうと、ごまかそうと頭を使う輝。

しかし、時は既に遅かった。

「輝さん。ちょっとこっちに来てくれますか？」

「……はい」

海を抱きしめながら自分のことを呼ぶ雫に、輝はチェックメイトのコールを聞いた気がした。

重い足を引きずるように雫の方へと、一步々動かすが、その牛歩を雫は許さなかった。

「……速くしろよ？」

「イエスサーッ！」

普段決して外さない敬語雫が外す時、それはすなわち、魔王が『大』魔王へとレベルアップした時だ。

雫は抱きしめている海から片手を離し、目の前までとんできた輝の胸倉を思い切りつかむ。

「輝さんの手には多くの人の命が預けられているの。そこを忘れるなよ？」

「し、失礼しました！以後気をつけますっ！！」

「その言葉、忘れるなよ？」

「イ、イエスサーッ！！」

冷や汗をたらたらと流しながら雫に向かい敬礼をする輝。

その姿を確認してから、雫は輝から手を離し、笑顔を浮かべる。

「はい。じゃあ輝さん。今お茶入れますから、着替えてきてくださ

いね」

「は、はい……」

一瞬で魔王モードを解除し、いつもの微笑みを浮かべキッチンへと向かう雫。

しかし輝は、いまだに恐怖から抜け出せずにいた。

「……海」

同じように、恐怖のあまり立ちすくむ海に輝は話しかける。

「聡い君だから見ていてわかったと思うけど、雫のことを怒らせるのはやめた方がいいからね……」

「……うん」

げっそりとしている輝を見て、海は絶対に雫のことだけは怒らせないようにしようと心に決めたのだった。

「さあ海！これを受け取ってくれたまえ！」

先ほどのやり取りが嘘のように、夕食をしながら穏やかな会話をしていた輝と雫。

そんな二人を不思議そうに眺めていた海に、輝は先ほど海に差し出していた紙袋を、再度海に差し出す。

「……なに、これ？」

「ご飯茶碗をテーブルに置きながら、海は訝しそうにそれを見やる。
そんな海に、輝は楽しそうに言う。

「お土産だよ！お土産！」

「おみ、やげ……？」

輝の口から出てきたのは、海の知らない単語だった。
その単語の意味を問うように、海は雫に視線を向ける。

海の視線の意味をきちんと受け取った雫は、彼と同じように茶碗と箸を置き、言う。

「お土産、っていうのはね、どこかへ出かけた時に親しい人や家で待つ人のために買ってくるプレゼントのことよ。ね？輝さん」
「もちろんだとも」

雫に笑いかけられ、輝は頷く。

「なぜ雫に意味を問うような視線を向けたのか、ひじょーに気になるところだけど。まあ、聞くとへこみそうだから聞かないけどね。これは海を思っつて、海のために買ってきたものさ！だから受け取ってくれたまえ！」

そう言っつてにこやかに笑っている輝を見て、海は疑問を感じた。
自分の中に浮かんだそれを、海はそのまま口にする。

「……なんで、こんなことするの？」
「こんなこと、とは？」

輝は、海の言葉の指すところの想像はついていた。ついていたが、あえて聞き返した。

海は言う。

「だから、なんで俺なんかこんなもの買ってくるの？」

冷たい瞳の海が口にしたのは、やはり輝の想像通りの言葉で。

「俺にこんなもの買ってきてても、なんのメリットもないだろ。それなのに、なんでこんなことするの？」

海は、別に自分のことを卑下しているわけではない。卑屈になっているわけでもない。

海の中では、それが『常識』なのだ。

今まで一度としてものを貰ったことのない（昨日の出来事は、海が『近藤』になってからの出来事はカウントしない）海は、自分が貰えなくて『当然』と、貰えることを『異常』と認識するようになっていた。

だから、自分に対してお土産とやらを買ってくる輝の行動に、輝は疑問を覚えたのだ。

些細な愛情にすら疑問を感じてしまう悲しい少年。

輝達が普通の、どこにでもいそうな大人達だったら、この少年の

『異常』なまでの孤独に耐えられず、これまでの大人達と同様に彼から距離を取っただろう。

——しかし、輝も雫も、そんな『普通』の大人ではなかった。

海の孤独を理解した上でなお、いや、理解したからこそ、一緒にいようと、その孤独をなくそうと、二人はそう思った。

少年のような顔に大人の笑顔を浮かべて、輝は言う。

「メリットならあるさ」

「え……？」

海の中には決してなかった答え。それを「ある」と言い切った輝に、海は目を見開く。

驚きの表情を浮かべている海に、輝は笑いながら続ける。

「僕が海にお土産を買ってくるメリット。それは、海と仲良くなれる」

「……」

それは、海の理解の範疇を超えていた。

（俺と……仲良く……？）

理解不能だった。意味がわからなかった。それがどうしてメリツトになるのか、海には全く理解出来なかった。

混乱する海。

そんな海の頭に手を伸ばし、優しく撫でながら輝は言う。

「お土産を買ってきて、それで機嫌を取ろうなんていう意味じゃないよ。お土産は、あくまで手段さ」

「……手段……？」

眉を寄せ、疑問を浮かべる海に、輝は「そう」と頷く。

「僕がなにを考えてこれを買ったのか、それに対して海はどう思うのか。そういうお互いの意見を交換し合って、お互いを知り合ってそうやって仲良くなっていきたい。まあ、実際は海のことを考えてたら自然と買ってしまったものなんだけどね。あえてメリツトを見つけるとしたらそんな感じかな」

「……」

照れくさそうに笑う輝を、海は不思議な気持ちで見ている。

（仲良くなる……。お互いの意見を交換し合う……。そういえば昼間、あいつも同じようなことを言ってたっけ）

海は工藤の帰り道、雫がケーキを買う理由を言った時のことを思い出す。

（あの時もあいつの言うことを理解出来なかったけど、今度も全くわからない）

相手のことを知って、どうなるというのだろうか？
自分のことを知って楽しいのだろうか？

海は今まで周りの人のことを知ろうとはしなかったし、周りも海のことを知ろうとはしなかった。

それが普通だった。

知らなくても困ることなど、なに一つなかった。

（仲良くなってどうする？お互いを知ってどうする？）

その答えを、海は出せない。出すことが、出来ない。

知らないのだから、答えを出せるわけがないのだ。

出口のない迷路をさ迷う海に、輝は優しく笑いかける。

「まあ、そういうわけで。受け取ってもらえるかな？」

自分に向けられる笑顔。

頭の上にある温かく大きな手。

そして、自分に差し出されている紙袋。

答えは出ない。どうしたらいいのかもわからない。

けど、選ばなきゃいけない。

受け取るかどうかを。

選択に困った海は、昨日と同じように輝の内心を『観る』ことにした。

そうやってきちんと彼の言葉に裏がないことを確認してから判断することにしたのだ。

(……変化なし、か)

昨日と同じ視線を向けるが、やはり輝に変化はなかった。

もっとも、昨日と同じようにやましいところなど微塵もない輝が態度を変えるわけもないのだが。

(……まあ、悪意はなかったし。貰えるならもらっておくか)

そう理由づけ、しかし多少の警戒を残しながら海はそれを受け取ることにした。

子供の海が持つには、少し重い紙袋。

それを海は両手でしっかりとつかみ、自分の方へと引き寄せる。

「……開けて、いいの？」

恐々と輝に尋ねる海に、輝は優しく頷く。

そうやって許可された海は、もしも手をあげられてもいいように輝と雫の様子を窺いながら、慎重に紙袋の中身を取り出す。

中に入っていたのは、丁寧に包装された四角い箱。

それを取り出した海は、この先どうすればいいのかわからず、雫に視線を向ける。

「海、どうしたの？」

海の視線に気づいた雫は、海に問う。

それに対し、海は静かに聞く。

「……これって、どうすればいいの？」
「え……？」

海の問題が理解出来なかった雫は、小さく声をあげた。

（どうすればいいって、どういう……ああ。なるほど）

頬に片手を添え、どういうことかと考えていた雫だが、すぐにその答えにたどり着く。

かわいそうと同情することは簡単だ。

しかし雫はそうせず、丁寧に海に説明を始める。

「リボンを解いて、包装紙、巻いてある紙を取ればいいのよ」
「……」

雫の言葉を受け、海は取り出した箱を見る。

動物達のイラストが描かれた白い包装紙に、赤いリボン。
そこにあつたのは、確かに雫の言葉通りのものだったが、しかし、それでも海はどうしたらいいのかわからなかった。

物心ついた時から今日までプレゼントなど貰ったこともない海は、リボンや包装紙といった名称も、それらの開け方も知らなかったのだ。

それを悟った雫は席を立ち、自分が座っていた白い椅子を海の前に置く。

彼女のその行動の意味を理解出来ない海は、眉を寄せ警戒をする。そんな海に雫は微笑んだ。

「海。ここに置いて。一緒に開けましょう」

彼女のその言葉で全てを理解した海は警戒を緩め、彼女の指示に従い椅子の上に箱を置く。

雫は海の横に移り、箱を指差しながら説明を開始する。

「まずはリボンを解くところから始めましょう。こことここを持って」

雫の指示通り、海の小さな手がリボンの端をつかむ。

「そうしたら、そのまま両方を引っ張って。そう」

おっかなびつくりといった感じで、海がゆつくりとリボンを解く。その様子を輝は微笑ましそうに眺めていた。

「うん。よく出来ました。偉いわ、海。じゃあ、次は包装紙を取りましょう。あ、海」

包装紙の取り外し方を伝えようとした雫だったが、その前に、息子に礼儀を教えることにした。

海と目を合わせ、優しく、しかし真剣に言う。

「プレゼントっていうのはね、誰かのために、その人のことを思っ
て贈るの。だから、プレゼントを受け取った人は、それに感謝しな
くてはいけないの。わかるかしら？」

「……よく、わからない」

誰かのことを思ったり、誰かになにかを贈ったり。

そういうことをしたことのない海に、そういう気持ちを理解しろ
と言う方が間違っている。

経験したことのないことは、想像することすら難しいのだから。

怒られるかも、そう思い怯えながら言った本音。

そんな海に、雫は笑顔を向けた。

「今はわからなくていいわ。いつか必ずわかる時がくる。その時のために覚えておいて」

そう笑いながら海の頭を優しく撫でる雫。

本当にそんな日がくるのかは疑問だったが、海はその言葉に黙って頷いた。

雫は微笑みながら続ける。

「誰かからプレゼントを貰った時、その人に対する感謝の気持ちを忘れてはいけないの。……残念だけど、この世界にはそれが出来ない人もいる……。贈り物なんて貰って当然。そう思う人も、確かにいるの」
「……」

海はその言葉に、あまり驚かなかった。

自分のようにものを貰ったことのない人間もいるのだから、反対に貰って当然と思う人間もいるのだらうと、海は思ったのだ。

そんな風に子供らしくない考えで納得した海に、雫は言う。

「私は、私達はあなたにそうなってほしくないの。どんな小さいものでも、例えそれが自分には不必要なものでも、贈ってくれた人に

は感謝の気持ちを持ち続けてほしいの」

——前提が違う。

それが海の素直な感想だった。

プレゼントとを貰うことが『異常』な自分が、貰うことを『当然』などと思えるわけがない。

なる、ならないではなく、なれないのだ。

だから、感謝の気持ち云々はともかく、雫のその願いだけは簡単に叶えられそうだと海は思った。

——思ったが、海はそれを口に出すことは出来なかった。

雫の目を見ていたら、なぜかそれを口にすることが出来なかったのだ。

どう答えたものかと、頭を悩ませる海。

そんな海の考えをしっかりと理解した輝が、再度海の頭を撫でる。

「無理に答えなくていいよ。今は覚えておいてくれるだけでいい。いつかわかる日が来た時に、言葉の意味を考えてくれればそれでいいんだ」

輝の言葉にも、海は懐疑的だった。わかる日が来るなど、とても思えなかったからだ。

そんな考えが如実に顔に表れる海。

そんな海の顔を見て、輝と雫は顔を見合わせて笑った。

「それで、私がなにを言いたいかと言うと」

今の海にこの話題を続けても水掛け論にしなければならないことを悟った雫は、話を進めることにした。

「プレゼントを綺麗に包んでいるこの紙、包装紙っていうんだけど、この包装紙を綺麗に開けてほしいの」

包装紙の開け方など知らない海は意味がわからず眉を寄せ首を捻る。

雫は言う。

「この包装紙をね、ビリビリに破いて開ける人もいるの。その行為を、プレゼントを贈った人が見ている前でやるのは、とても失礼にあたるの。もちろん、見ていない場所でも私はしてほしくない。贈られたプレゼントは、確かに受け取った人のものなのだけれど、贈ってくれた人への感謝を忘れずに、包装紙一つとっても、丁寧に開けてほしい。私はそう思うの」

「……」

雫の言葉に頷くことは簡単だ。

言葉の意味も考えず、ただ首を上から下へと落とせばいい。

つい最近の、いや、『昨日までの』海だったら、迷わずそうしただろう。

……誰も、海が考えることなど望まなかったのだから。

しかし、今はそうではない。

雫も輝も、海に考えることを望んでいる。

そのことは、海の意識に大きな変化をもたらした。

なにも望まれなかった、なにも期待されなかった海。
常に孤独で、世界から孤立していた海。

そんな彼に、輝達は小さな波紋をもたらした。

それは、大きな湖に小さな小石を投げ入れたような、僅かな波紋。
しかし、その波紋はゆっくりと、確かに広がっていく。

この二日間、海は初めて考えることを求められ続けた。

それは、あたかも劇薬による科学反応のように、海の意識を変化させる。

海は考える。

雫の言葉を頭の中で繰り返し、意味を理解しようとする。

だが、やはり理解することは出来なかった。

人になにかを贈ったことがなく、贈られたこともない海は、どう頑張っても、そういう状況を想像することが出来なかった。

海はため息を一つはき、雫に視線を向け、言う。

「……考えたけど、やっぱりわからない。プレゼントなんて貰ったことも、贈ったこともないから、その時の気持ちなんてわからない」
自分の意見など求められず、常に罵声を浴びせられ続けた海にとって、自分の考えを言葉にするという行為も難しいことだった。

しかし、人間は慣れる生き物である。

昨日から、考えることと同様に求めら続けたこの行為に、海は早くも慣れ始めていた。

むろん、本人は意識してないが。

雫は海の言葉に笑顔を浮かべ、彼の頭を撫でる。

「大丈夫。私達はあなたにことあることにプレゼントを贈るから、嫌でもわかるようになるわ」

そう言って笑う雫を、微笑みながら頷く輝を見て、海は不思議な気持ちになっていた。

「そうだね。きっと今後も間違いなくいろいろと買ってくると思うけど、今はこの最初のお土産を開けてほしいなー、なんて」

「まあ」

おちやらせる輝に、微笑む雫。

そうして再開されるプレゼントの開封。

「そう。そこを優しく持って……」

ゆっくりと、海がわかりやすいように包装紙を解く説明をしている雫。

海の小さな手が、ゆっくりと、だが一生懸命に包装紙を解いている。

「まあ」

完全に包装紙が解け、中から出てきたのは、赤い車のラジコンだった。

それを見た雫は感嘆の声をあげ、輝は得意げな笑顔を浮かべ。

「……」

そんな中、ラジコンを見つめ一人固まる海。
そんな彼の姿を見て、輝は焦りの表情を浮かべる。

「もしかして。気に入らなかったかい……？」

もしもそうなら、今すぐにも他のものを買いに行く勢いで（実際、輝はそのつもりだった）輝は身を乗り出し海に問う。

海は困惑の表情を浮かべながら、輝に言う。

「……これ、なに……？」

「……ああ」

輝は納得する。

海は気に入らないから声をあげなかったのではなく、知らないものだったから反応に困っていただけなのだ、と。

輝は食事を完全に中断し、椅子から立ち上がり海の横へと向かう。

「これはね」

海からラジコンを箱ごと受け取り、輝は箱の中からそれを取り出し、初設定を行い床に置く。

「こつやって遊ぶものなんだよ」

海に笑顔を向け、輝はラジコンのコントローラーを動かした。

「——っ!？」

唸るモーター音と、勢いよく駆け出す赤い車に、海は驚きの声をあげた。

「おおー!最近のラジコンはすごいねー」

一方輝は、子供のように声をあげてコントローラーを操る。

唸りをあげる赤い車。

それを海は、口を開けて目で追続ける。

輝はそんな海の姿に微笑み、彼の前で車を止めコントローラーを差し出す。

「海。やってみるかい？」

輝の言葉に、海は弾けたように顔を彼へと向ける。

目を見開きその瞳を輝へと、そして彼の持っているコントローラーへと。

海の瞳に浮かんでいるのは、二つの感情。

好奇心と、猜疑心だ。

初めて目にしたラジコン。それを動かしてもいいという事実。それに、海の年相応の好奇心がうずく。

しかし、同時に浮かぶ猜疑心。

本当にこれに触ってもいいのだろうか、と。

実はこれは自分を傷つけるための手なんではないだろうか、と。海の経験が警鐘を鳴らす。

戸惑う海。

そんな海の背中を、輝が優しく押す。

「これは海のために買ってきたお土産なんだ。出来れば受け取ってほしいな」

「……」

海は輝の瞳を見る。

……そこには、微塵の悪意もなかった。

「……」

海はおずおずと、輝の表情を窺いながらコントローラーへと手を伸ばす。

ゆっくりと、ゆっくりと。

コントローラーに触れる少し手前で躊躇い、海の手が止まる。

本当にいいのか、本当に大丈夫だろうか。
そんな恐怖が込み上げてくる。

海の躊躇い。

それを打ち破ったのも、やはり輝だった。

「はい」

「っ！」

押し付けるように渡されたコントローラーを、海は落とさないように両手でしっかりとつかむ。

海が驚いた表情を輝に向けると、彼は満面の笑みを浮かべていた。彼はそのまま海の真横に移り、海の手をつかみ、コントローラーを正しく持たせる。

「ここをこうすると前進。こうすれば後進。ここを動かせば右に曲がって、こうすると左に曲がるよ」

海の手ごとコントローラーを動かし、一通りの説明をした輝は手を離す。

そうして、いまだに戸惑いを浮かべている海に笑顔を向け、サムスアップをする。

「さあ！思い切り走らせたまえ！」

綺麗に閉じられたウイंकを見て、手元にあるコントローラーを見て。

そうしてもう一度輝達の顔色を窺ってから、海はおもむろにコントローラーのレバーを倒す。

「わぁ……」

唸りをあげて少しだけ前進した赤い車。

初めて手にしたラジコンに、初めて与えられた、自分だけの玩具に、海は声を漏らした。

「お。なかなか上手いじゃないか」

おっかなびつくりの海の操縦は、お世辞にも上手いと言えるものではなかった。

急発進や急停止。それに蛇行を繰り返す。

だが、輝は海を否定しなかった。

こうするんだよと、自分を押しつけなかった。

自分の思うがままに生きてほしい、それが輝達の望みだったから。

海にしては珍しく興奮をあらわにし、子供のような、いや、年相応の本当の笑顔を浮かべ、ラジコンを操縦した。

今、海は、とても不思議な気持ちになっていた。

今までには感じたことのない暖かく、柔らかい気持ち。

この二人と一緒にいると、度々になるこの気持ち。

名前の知らないこの気持ちを、海は、嫌とは思わなかった。

楽しそうに遊ぶ海と輝。

そんな二人が夕食を再開するのは、数分後、雫がたしなめてからだった。

「海！約束通り、明日は遊園地に行こうじゃないか！」
「……」

海が近藤家一員のとなり迎えた最初の金曜日の夜。

その日輝は、帰宅するなり、いつぞやのようにテンション高くそう叫んだ。

あの時と同じようにソファーに座りテレビを見させられていた海は、あの時とは違い驚かなかった。

慣れてしまったのだ。

ことあるごとに声をあげ、大袈裟な態度をとる輝の『奇行』に。

一度だけ、輝に冷たい視線を送り、すぐにテレビへと視線を移す。
流れている教育テレビに興味があったわけではない。

無視するのが輝に対する一番いいあしらい方だと、海は学んだのだ。

だが――

「酷いじゃないか海！きちんと僕の話聞いておくれよ！」

むろん、輝がそれで納得納得するわけがない。

海の肩をつかんで前後に揺すり、自分のことを見させようとする輝。

揺すられながら、海はため息を一つはき、視線を隣に座っている雫へと移す。

それを見た雫が、輝に冷たい笑顔を向ける。

「輝さん。手を離してくださいね」
「イエスサーッ！」

魔王モードの雫の言葉に、輝は迅速な反応で海から離れ。

そんな寸劇に微塵の関心も払わず、海はテレビを見続ける。

この数日間で、海は輝の扱い方を完璧にマスターしていた。

いつもなら雫に促され輝は着替えに行き、そのあと夕食が始まるはずだった。

しかし、今日はそうではなく。

「でも、海。明日遊園地に行くのは本当よ」

ストッパー役の雫が、輝の言葉を引き継ぐ。

普段とは違うこの行動に、また、遊園地という名所名に海は眉を寄せて雫を見る。

「遊園地……？」

雫はいつもの優しいアルカイクスマイルを浮かべ、頷く。

「あなたが私達と家族になった日、デパートで約束したのだけど、覚えていないかしら？」

海は左上に視線を送る。それは海の考える時の癖だった。

「……」

あの日のことを思い出そうとするが、よく思い出せなかった。

今でこそこの生活に慣れつつあるが、あの時は今までと全く違う二人の大人に、警戒と戸惑いを抱き続けていたから。

沈黙を続ける海に、雫は言う。

「覚えていないのならそれでもいいわ。ねえ海。明日一緒に遊園地に行きましょう」

「もちろん僕も一緒だよ！」

二人の言葉に、笑顔に、海は顔を伏せる。

海の中には二つの感情が渦巻いていた。

行きたい。けど行きたくない。

そんな二つの感情が。

休日開けの月曜日。

昨日家族で遊園地に行ったんだと、とても楽しかったと笑うクラスメート達の会話を耳に入れながら。

休日、自分を残し出かけ、嬉々とした表情で帰ってくる家の中の『他人』を見て。

羨ましかった。自分も行ってみたいと思った。

……けど、海は知っていた。そんな日が来ることはない。

楽しくて、人を笑顔にする憩いの場。

家族や仲間で出かけ、声をあげて笑う楽園。

そんな所に、孤独な自分が行けるわけがない。

——自分の外の世界。どんなに望んでも、決して自分が入ることが出来ない世界。

……そんな場所など、そんな世界など、消えてなくなればいい。
海はいつしか、そのように考えるようになっていた。

懂れて、けど、憎い世界。

その世界に、行けると思っていなかった世界に、海は行くことを突然許された。

一緒に行こうと言う人間が現れた。

海は戸惑う。

行きたい。

ずっと夢見ていた場所だ。当然そう思う。

しかし、長年自分の外の世界だと思っていたその場所に行くことに、海は恐怖を感じていた。

本当に自分が行っても平気なのだろうか？
自分を拒んだりしないだろうか？

そんな妄想に近い疑惑を抱く海。

そんな彼の心情を敏感に感じ取った雫は、体を前に倒し、海の顔を覗き込む。

突然現れた雫の顔に、海は慌てて身を引いた。

「な……なんだよ!？」

「心配いらないわ。海」

「え……?」

雫は優しい笑顔で海に言う。

「遊園地は怖い場所じゃないわ。それに、あなたには私達がいる。私達はあなたから離れないわ。だから大丈夫よ」
「——っ!」

その言葉に、海は目を見開いた。

……それは、『今』かけてほしい言葉だったから。

驚きの海に、雫も輝も笑顔を向ける。

それは濁りの一切ない澄んだ笑顔。

それを見て海は泣きたくなった。

（いつも……いつも……！こいつらは……なんなんだ……！？）

思い返せばいつもそうだった。

海の内心を、彼らはいつも正確に読み取り、いつも海がほしい言葉くれたを。

（今までは誰もが俺に無関心だったのに……。誰も俺のことを見ようとしなかったのに……。それなのに……。それなのにこいつらは……！）

裏切られ続けた海にとって、優しさは毒だ。

信じれば裏切られ、無視すれば生意気と叩かれる。

だから海は誰も信じなくなった。人から距離を取るようになった。

……そうすれば、必要以上に傷つくことはないから。

——そんな海が、彼らに出会って変わり始めた。

いや、『元に戻り始めた』というべきか。

まだ自分の人生に絶望する前の、人を信じていたころの海に。

そのことを、海はまだ意識していない。と、いうより、そんな自分がいしたことすら忘れてしまっている。

だから戸惑う。

なんでこんな気持ちになるのかわからないし、彼らのことを信じたいと思ってしまう、自分がいるから。

（信じたら裏切られる。もう、何度も繰り返しただろ！？これは畏なんだよ！今だけなんだよ！……けど……）

海は窺うように輝と雫を見る。

再び目に入る、穢れ（けがれ）のない、嘘偽りが一切見られない、優しい微笑み。

「……」

目からこぼれそうになる雫。それを海は歯を食いしばり堪えた。

……弱みを、見せなくなかったから。

海の頭の中は混乱に満ちていた。
わけがわからなくなっていた。

彼らを信じていいのかわからない。信じたいのかもわからない。
今自分がどうしたらいいのかもわからない。

どうしたいのかも、わからない。

彼の小さな頭の中は今、多くの感情が飛び交っていてパンク寸前だった。

それはまるで、パンパンに空気が詰まり破裂寸前の風船のようで

あと少し空気を入れれば、あるいは衝撃が加われば、あっさり破裂する。

今の海は、それほど危うい状態だった。

無意識内に強く握り締めた手。それを雫が、優しく解きほぐす。
そのまま彼女は、海の手を優しく包み込むように握る。

「海。この世界に、あなたを拒む場所なんてどこにもないわ。もしそんな所があるとするとしたら、それは、その場所があなたを拒んでいるのではなくて、あなたがその場所を拒んでいるの」

「俺……が？」

雫は頷く。

「ええ。あなたが諦めてしまっているだけなの。そこは自分の『外

の世界』だって」
「——っ!？」

雫のその言葉は、海の熟れたトマトのように脆弱な心を、強くわしづかみにした。

「なん……で……」

ままならない呼吸。全身に浮かぶ鳥肌。

寝起きのように働かない頭に、雫の言葉だけが悪夢のように流れ続ける。

なぜこうまで自分の心の内を読まれるのか、海は理解することが出来なかった。

目を見開き、口を開けたまま自分を見つめる海の姿に、雫は小さな笑みを浮かべる。

その、いつものアルカイクスマイルを浮かべたまま、雫は海の鼻を優しくつつんだ。

どうやら彼女は、この行為を気に入ったらしい。

「——っ」

鼻をつままれた海ははつと意識を戻し、慌てて鼻をつまむ雫の手を払う。

その行動に動揺した様子もなく、雫はその手を海の頭へと移した。

「私達はね、あなたの世界を広げてあげたいの」

意味深な雫の言葉。

それを海は、目を細め、一字一句逃さないように・そこに隠された真意を見逃さないように、注意して聞いた。

「あなたの世界は狭すぎる。そして閉じてしまっている。もったいないと、私は思うの。だって、世界は広いんですから」

「……世界が、広い？」

「ええ」

半信半疑の海に、雫は笑顔で頷いてみせる。

「嫌な世界を見続けてきた人は、決まって世界を閉ざしてしまう。こんな世界には、もう希望はないって」

「……」

雫の言葉は、『ただの』七歳児が理解するには難しすぎた。

——が、海は『ただの』七歳児ではない。

実際に『それ』を経験した海は、雫の言葉の意味するところを、なんとなく理解した。

雫は続ける。

「確かにね、世界には嫌なところも存在する。でもね、それだけじゃないの。そんな嫌なところは、世界の一面にしか過ぎないの」
「一面……？」

海は眉を寄せる。今度は理解出来なかったから。

雫は優しく笑う。そうして、海の頭を優しく撫で、言う。

「今はわからなくていいわ。いつか、あなたにもわかる日がくる。この世界も捨てたものじゃないって」
「……」

こればかりだ。

海はそう思った。

いつも肝心なところは、いつかわかる日がくる、そう言っ
てしま
かして。

（ずるい大人だ……）

不満の視線を雫に向けるも、彼女はそれを笑顔で受け流す。
それが、余計に海を苛立たせた。

苛立ちを隠さず、そつぱを向き、口を尖らせる。

——彼は気づいているのだろうか？自分が、そんな『子供のような』行動をしていることに。

自らの意識とは関係なく、少しずつ年相応の行動をするようになった海。

そんな海の無意識の内心の変化を、雫も輝も、嬉しそうに迎えていた。

「さて」

このまま愛息子のことをいつまでも見ていたかったのだが、勘のいい海のこと、すぐに彼らの視線に気づき不機嫌になるのが目に見えていたため、雫は両手を胸の前で合わせ、声をあげた。

そんな彼女の行動に、海は彼女のことを警戒心をあらわにして見つめる。

雫はそんな彼の瞳が見えていないように、普段通りの笑顔を浮かべていた。

「とりあえず、明日は遊園地に行きます。異論は認めません。いいかしら？」

(……異論を認めないんだったら聞くなよ……)

海はそんな思いを抱きながら、小さく頷く。

瞬時に咲く二輪の笑顔。

それを横目に収め、海はすぐに視線を外す。

(遊園地……か)

急に決まった明日の予定。

夢にまで見た憧れの楽園。どんな場所なのか想像すら出来ない憩いの場。

見知らぬ楽園に馳せる思い。
無意識に緩む口元。

……海は気づいていない。あれほど感じていた恐怖が、跡形もなく消え去っていることに。

少年の閉ざされた狭い世界。

その世界を囲む壁に、今日、小さなひびが入った。

このひびは、次第に大きく広がり、やがて海の壁を壊す日がある。

その時、海はその壁と一緒に壊れてしまうのか。

それとも、新たな世界に踏み出すのか。

それは、今は誰もわからない。

けれど、間違いなく。彼らの時間は今、動き始めた。

19（後書き）

更新が遅くなり、大変申し訳ありませんでした m（――） m

「さあ海！着いたよ！僕の手を取りたまえ！」
「うるさい。邪魔だからそこをどけ」

この日も海の毒舌は軽快だった。
車の後部席のドアを開け、海に手を差し出した輝をたった一言で
撃墜し（ドアのすぐ近くに四つん這いになり、へこんでいる輝を見
ると言わなきゃよかったと後悔するが）一人で車から飛び降りる。

——そして息をのんだ。

車から飛び降り、顔をあげた瞬間に飛び込んでくる、朝の光に照
らされた見たことのない建造物達。

上下左右に走るジェットコースターのレール。

園内の中央に位置する、大きな観覧車。

天高く伸びる、垂直落下するアトラクションの柱。

絶叫系のアトラクションから聞こえてくる、大きな悲鳴。
駐車場まで聞こえてくる笑い声。

それらを見て、聞いて。

想像を超える現実に、海は目を大きく見開き、口を開けた。

それを見た雫と輝（自力で立ち直った）は顔を見合わせて笑い合う。

雫は海の横にしゃがみ、横から手を伸ばし海の鼻をキュッとつまむ。

馴染みになりつつあったその刺激に、海は意識を戻し雫を見る。
雫は海の鼻から手を離し、アルカイツクスマイルを浮かべながら立ち上がり、彼に手を差し出す。

「海。行きましょう。今日は思い切り楽しみましょう」

反対側から、輝も手を出す。

「そつだよ海。今日はとことん遊ぶんだからね！」

笑顔の二人。

嫌みのない、心から自分と一緒に楽しみたいと思っている、そんな笑顔。

海は顔を伏せる。

暖かい気持ちが溢れ、涙が溢れそうになったから。

そんな海から目を離さず、笑顔と手を向け続ける二人。

海は大きく深呼吸を繰り返し自分を落ち着かせてから、二人の手をそつと握る。

輝も雫も、嬉しそうに笑った。

「さあ海！行くぞー！」

「ええ。行きましよう。海」

「……うん」

手を握り、歩き出す輝に雫。

手を引かれ、歩き出す海。

夫妻の顔に浮かぶ笑顔。その眼差しは愛おしい息子に向けられていて。

海はそんな夫妻の視線に一切気づかず、未知の、しかし楽しそうな世界に意識を奪われていた。

雫も輝も、とても嬉しくなった。

海の顔に、笑顔が浮かんでいたから。

「……ところで、海の身長で、全てのアトラクションに乗れるのかしら？」

「……あ」

ふと思いついた雫の問いに、輝は答えることが出来なかった。
場所だけ選んで、そういう細かいところを調べ忘れたのだ。

「……」

乗れなかったら、海が満足出来なかったらわかっているだろうな、
そんな意味を込めた雫の凍てつく視線を受け、輝は自分の命運を天
に願った。

「っしやーっ!」

最初のアトラクション乗り場前で、輝がそうガッツポーズしたのは、
また別のお話し。

海にとって、そこは別世界だった。

見たことのない機械達がところせましと立ち並び、大きな声をあげながら動いていて。

園内の人々は笑顔を浮かべ、それぞれ目的のアトラクションへと向かい、不規則な流れを作り。

いたるところから聞こえる様々な音楽。

機械の唸り声。

アトラクションの音楽。

人の叫び声に笑い声。

それらが見事な和音を作り、一つの歌を歌っているようだった。

憧れの楽園へと繋がる入口のゲートをくぐり、海は再び口をあけ固まった。

その様子を見て、輝と雫は顔を見合わせて微笑む。

持っていた鞆を輝に預け、雫はいつものようにしゃがみ、海の鼻をつまむ。

「海。どこから行きましょうか？」

首を少し傾げ微笑みながら言う雫に、海は目をぱちぱちとさせる。むろん、鼻をつまむ手ははらったが。

「……どこに行ったらいいか、わからない」

遊園地に一度も来たことがない海は、なにがあるのかはもちろん、名称も知らなかった。

それゆえ、どこに行ったらいいのか、わからなかったのだ。

むろん、そのことを雫は理解している。
理解した上で彼女は聞いていた。

海に、自分の外の世界にもっと興味を持たせるためと、自分で選ばせることを学ばせるために。

雫は笑いながら言う。

「じゃあ、海が興味を持った所から回りましょう。ここから見える所で、あれはなんだろう、って思った所はないかしら？」
「……」

海は困った。正直言って、どれも珍しいもの達ばかりだったから。

一番最初。雫達に引き取られることになった日、あの時もデパートで海は選ぶことを強要された。

あの時から彼女達はことあるごとに海に選ぶことを強要してきたため、少しは選ぶことに慣れた海だったが、今はあの日と同じ気持ちになっていた。

（どれもわからないものばかりだから、選んでくれた方が助かるんだけどな……）

そんな意味を込めた視線を二人に向けるが、彼女達は『あえて』気づかないふりをした。

にこにこ微笑む二人に非難の視線を向け、海は小さくため息。そうして、海は視線をさ迷わせる。

これまでの経験から、こうなったら自分が選ぶまで彼女達はここを動かないということを学んでいたのだ。

顔を右へ左へ。それをもう一度繰り返す。

海が一番近くにあり、一番目立っているアトラクションへと目を止める。

海はおずおずと、そのアトラクションへと指を向ける。

「……あれ」

雫と輝は海の指を追い、そして……。

「まあ」

「……」

雫は小さく声を上げ、輝は冷や汗をかいていた。

海が指差したのは、身長制限のあるジェットコースターだったから。

「……」

「はは……ははは……」

雫は輝に、わかってるだろうな、という視線を向け、それに対し、輝は乾いた笑い声をあげて。

「……？」

不可解な行動をする二人に、海は眉を寄せる。

雫は、今輝に向けていた視線が嘘のような、優しく穏やかな瞳を海に向け、彼の頭を優しく撫でる。

「なんでもないわ、海。さあ行きましょう。輝さんも。逝きましよう」

「……………雫。今、もしかしたら『いく』の字が違ったんじゃない」

冷や汗を垂れ流しながら聞いた輝に返されたのは、海に向けているのとは違う種類の『いい』笑顔だった。

「海。どうだった」

「……………すごかった」

無事、一命を取り留めた輝が笑顔を浮かべながら海にジェットコースターの感想を聞く。

それに対して、海は半ば放心しながら答えた。

初めてのジェットコースターは、海の度肝を抜いた。海の世界に革命を起こしたと言っても過言ではない。

屋根もなく、細いレールの上を高速で走り抜ける乗り物。

坂を登ったかと思えば急斜面を一気に滑り、何度も回転を繰り返す理不尽極まりない乗り物。

それが海がジェットコースターに抱いた印象だった。

「楽しかった？」

ジェットコースターに乗った直後だというのに、雫は普段と変わらないアルカイクスマイルを浮かべながら再び海に感想を促す。

海は考える。

先にもいった通り、海がジェットコースターに抱いた印象は『理不尽極まりない乗り物』だ。

そのことは今でも変わっていないが、楽しくなかったか、という
と返答に困る。

怖い思いをしたというのに、また乗りたいと考えてしまう自分が、
確かにいた。

少々考えた結果、海は「……それなりに」と答えた。

雫は微笑む。

素直じゃない息子の感想が、想像していた通りのものだったからだ。

降りた時から繋いでいた海の手を優しく握りなおし、雫は彼に笑顔を向ける。

「さあ、海。次はどこに行きましょうか？」

再び自分に委ねられた決定権。

輝にも視線を向けるも、彼も自分に笑顔を向けていて。

（はあ……）

内心で大きなため息をつき、海は次の目的地を定めるため、辺りを窺うのだった。

「ふふ。可愛い寝顔ね」

「出来ることなら僕も見たいよ」

背負った息子の顔をなんとか見ようと首を捻る輝の姿を、雫は楽しそうに眺めていた。

ジェットコースターから始まり、コーヒークップ、ゴーカートにフリーフォール。

様々なアトラクションを、目についたものから順に制覇していった三人。

最初はおずおずとしていた海だったが、昼を回るころには、自然と笑顔を浮かべて、二人を引っ張るようになっていた。

新しい世界が自分を受け入れてくれたことに安心したのだ。

しかし、アトラクションの残りが少なくなるにつれ、海の歩みは疲れから少しずつ遅くなり。

そしてついに、先ほどメリーゴーランドに乗っている最中に海は眠ってしまったのだ。

海を背負い、輝は雫に帰るかどうかの相談をした。

時刻は五時。

ここから家まで一時間ほどかかるので、夕飯を食べて帰るのにはちょうどいい時間といえた。

雫は頬に手を添え考える。

海の最初の遊園地だ。出来ることなら最後まで楽しませてあげたい。

だが、無理して起こすのも、酷というものだ。

長考のすえ、雫は『最後に一つだけ乗ってから帰る』という結論を出した。

今、三人はその最後の一つ、観覧車に乗るための列に並んでいるところだ。

海の寝顔を見ることを諦めた輝は、海のことを背負い直し、目の前にそびえ立つ観覧車を見上げる。

「しかしでかい観覧車だね」

「そうですね。なんでも、今の日本で一番大きい観覧車らしいですよ」

輝の独り言に律儀に返事をする雫。

彼女のその言葉に、輝は呆れたような表情を浮かべる。

「確か他にも日本一のものがあるんだろ？」

「ええ。ジェットコースターの長さや、フリーフォールの高さも、日本一らしいですよ」

雫の言葉に、輝はシニカルな笑みを浮かべ、肩をすくめる。
むろん、海を起こさないように注意しながら。

「日本一のものが数多くあって、しかも遊園地の名前が『ノワール・ヴォール』って、どれだけ『親バカ』なんだよ。あいつは」

その発言に、雫は口元に手を添え、くすくすと笑う。

「あら。輝さんに人のことが言えるのかしら」

「それは、まあ……」

海を引き取ってから今日までの一週間。

輝は毎日、彼のためにお土産を買って帰ってきた。

あの日のラジコンから始まり、テレビゲームに本。

自転車を買って帰ってきた日は、流石の雫も呆れたものだ。

そのことからわかるように、輝は海のことを溺愛している。だから雫の言葉に、彼は苦い顔を浮かべたのだ。

「でも、仕方ないですよ。だって、可愛いんですから」

優しく、まるで聖母のような笑みを浮かべて海を見つめる雫。その視線は輝が嫉妬を覚えるくらいで。

だが、それも仕方ないか、と輝は一人胸中で納得をする。自分もここ最近、海のことばかり考えているのだから。

自分自身に呆れ、ため息を一つ。

だが、彼は省みるつもりはないのだろう。なぜなら、彼の顔には笑顔が浮かんでいるのだから。

そんな、ありふれた親子の時を刻みながら、列は少しずつ前へと進む。

一步。また一步。

そうやっていよいよ観覧車に乗る、といったところで、タイミング良く海が目覚めます。

「ん……?」

雫は笑う。

「海。おはよう」
「……?」

雫に向けられているのはいつものアルカイクスマイルだが、海はそれに疑問を抱いた。

（おはよう……? 俺、いつ寝たんだ? それに、ここはどこだ? それにこの揺れは……っ! ?）

寝ぼけた海の頭がゆっくりと起動し、少しずつ状況を確認していく。

そして、今自分がいるところを理解した瞬間、一気にパニックに陥った。

「海。おは——」
「動くなっ!」
「——ぼほらっ! ! ?」

そのことを知らない輝が、雫と同じように海に挨拶しようとして首を動かした途端、落ちることを恐れた海の拳が頬を打つ。

火事場の馬鹿力を惜しみなく発揮している海の一撃は、大人である輝の三半規管を強く揺さぶり、彼の足はおぼつかないものになる。

ふらふらと揺れる輝。

彼の背にいる海は、それにより強い恐怖を感じ、輝を握る手に、いつの間にか彼の首に伸ばされた手に力を入れた。

「か……かい……し、しぬ……」

首を絞める海の手を引き離そうと輝が手を伸ばすも、三半規管の揺れた状態の輝と、パニックから普段以上の力を発揮している海では勝負にすらならなかった。

それを見て、雫は笑う。

「あらあら、まあまあ」

頬に手を添え、呑気に微笑む雫。

確かに自分に害のこない、対岸の火事ではあるのだが、自分の夫が目の前で苦しんでいるのを見てする態度ではない。

まあ、確かにいつものことではあるのだが。

むろん、いつものことで済まないのが輝だ。

命の危機にさらされているというのに笑っている妻に向かい、輝は非難の視線、もといSOSを出す。

「雫……たす……けて……」

「まあまあまあ」

輝の必死のSOSに、雫はようやく行動を起こす。

むろん、いつもの笑み（アルカイクスマイル）を浮かべたまま。

「海。こっちにいらっしやい」

海の肩に手を添え自分のことを認識させてから、彼女は彼に向かい手を広げる。

海はそれに飛び込んだ。

いつもの彼なら絶対しない行動だが、今はそれどころではなかったのだ。

雫は、出来るならこのまま海を抱いていたかったが、このままでいると輝の二の舞になることが目に見えていたため、ゆっくりと海

を地面へと降ろし、そのまま彼の手を握った。

「はあ……はあ……」

「まあ、海。大丈夫？」

荒い息を繰り返す海に、雫は心配そうな声と眼差しを向ける。
むろん、彼の隣で彼以上に荒い息を繰り返している輝には、一切の関心を払わない。

そのことに文句を言わず（言っても虚しくなるだけだということ
を輝は学んだ）代わりに海に向かい非難を飛ばす。

「……海。いきなり酷いじゃないか……」

「それはこっちのセリフだ！」

非難たつぷりの輝の瞳を、海は鋭い目で見返す。

「またお前は勝手に……！落ちたら危ないじゃないか！」

「そんなー。落とすわけじゃないじゃないかー」

「そんなのわからないだろ！？」

以前デパートでされた肩車。

途中から恐怖は感じなくなったが、それでも、慣れたわけではない。
い。

今まで経験したことのない高さ。
それを支えるのは、心を許していない他人。

もしかしたら落とされるのでは、そんな疑心暗鬼に海は陥っていた。

叫ぶ海の声に、周囲の視線が集まる。

だが、そんなものなど感じていないように、雫は海の手を引きながら、優しい声をかける。

「海。前にも言ったと思うけど、私達は決してあなたを落としたりなんかしないわ」

「……でも、今お前支えてなかったじゃないか」

パニックに陥っていたとはいえ、自分の背中に手が添えられているかどうかぐらいはわかる。

そして、今回それがなかったのを、海は確信していた。

鋭い視線で雫を睨む海。

しかしそれを、雫は微笑んで見返す。

「だって、今回輝さんがしていたのはおんぶですもの。おんぶは支え手がなくても落ちませんから」

「……おんぶ？」

知らない単語に眉を寄せる海。

肩車を知らなかった時点で予想はついていたが、おんぶを知らないという悲しい事実を突きつけられ、雫も輝も怒りを覚えた。むろん、今まで海を引き取ってきた人物達に。

納まらない怒り。

だがそれを引きずっても仕方ないことを、彼らは知っていた。

今、海を虐げてきた人達に会えるわけも、この怒りをぶつけることも、出来ないのだから。

その代わり、彼らは怒りを別の感情に変えて発散することを選択した。

そう、怒りとは真逆の、海を愛する、という感情に。

輝は海に笑顔を向け、ある親子を指差す。

「海。あれがおんぶだよ」

輝の顔を見てから、海は彼の指の先を追う。

そこにいたのは、ありふれた一枚の風景だった。

一日中連れ回され、疲れた表情を浮かべている父親。彼の隣で、そんな夫に対し文句を言っている母親。

そして、父親の背中で寝息を立てている一人の少女。

ありふれた一枚の風景。

それを見て、海は寂しさを覚えた。

……自分には、決してないものだから。

彼のそんな心情は表情になって表れる。

それを見た雫は、繋いでいる彼の手に、少しだけ力を入れ、自分の存在を誇示する。

輝も同様に、海の頭に手を置いた。

海に、決して一人ではないことを知ってもらうために。

そんな二人の行動に、海は弾かれたように顔を彼らへと向ける。

そこにある、紛れもない父親と母親の笑顔を見て、海は慌てて視線を逸らした。

自分の気持ちを悟られたことと、『安心』してしまったことが恥ずかしかったから。

「海。あれがおんぶ。あんな風に、肩車とは違って体全体を支えているから、おんぶされている人が暴れない限り絶対に落とすことはないのよ」

「そう。だから安心しておんぶされたまえ！海！」

いい笑顔を浮かべ、再度海をおんぶしようとしやがみ背中を向ける輝。

そんな輝に、海は一言だけ告げた。

「うざい」

輝はその場で体育座りをしていじけ、雫はそんな輝を『空気』として扱った。

輝を一発KOした海は、自分の心境の変化に戸惑っていた。

（今、俺は安心した……？安心したのか？この女達が俺の側にいることに……？）

一人でいることが当たり前だった。

名前だけの家族だった。

温もりなど感じたことなく、常に自分を守ること必死だった。

当然、家の中の他人を見て、安心したことなど一度もなかった。
彼らを見てするものは、いつも警戒だけだった。

（そんな俺が安心した……？ 側にいることに安心した……？）

今まで雫達と一緒にいて、海がそう感じるような前兆は何度もあった。

それは、朝起きた時、決まって自分に優しい笑顔を向けてくれる時であったり、自分の考えを言ってもきちんと聞いてくれる時だったり。

その度に海は暖かく不思議な気持ちになっていたが、その正体を、海は今、知ってしまった。

海は安心していたのだ。彼らと一緒にいることに。

それはつまり――

「海」

「――っ!？」

海がある考えに至った時、彼の体を浮遊感が襲う。

「な、な、なっ!？」

パニックに陥る海。

そんな海に、背後から声がかかる。

「さあ海。僕達の番だよ」

そこにいたのは、いつの間にか立ち直った輝で。

そこで海は理解した。

自分が後ろから抱きかかえられているのを。

「なにするんだ!それに番っていうのは……」
「これよ」

横にいた雫が、指を指しながら言う。

海はその指をたどった。

そこにあったのは青い色の丸い箱。
海はそれがなにかわからなかった。

雫は言う。

「観覧車っていうのよ。さあ。乗りましょう」

そう言い、まずは雫が観覧車内に乗り込み、次に海をかかえた輝が乗り込む。

これがどういったアトラクションなのか全く知らない海は、頭にクエスチョンマークを浮かべながら雫の隣に座らされ、輝は彼らの正面に、近藤家の食卓の位地に座った。

「それでは、行ってらっしゃーい」

係員の女性に笑顔で見送られ、海達の観覧車の旅が始まる。

そしてすぐに、海は再びパニックに陥るのだった。

「な、揺れ……！？しかも高く……！？」

観覧車がその高さを増していくにつれ、海は次第にパニックになつていった。

ジェットコースターとは違い体を固定するものはなにもなく、不安定に揺れる小さな箱。

ゆつくりと高度を上げていく観覧車に、海はジェットコースター以上の恐怖を感じた。

パニックに陥り、落ち着きをなくす海に、輝は苦笑いを浮かべながら言う。

「海。動く方が余計に揺れるよ」

彼のその言葉が海に届いた瞬間、彼は動きを止めた。

まるで、そこにいるのが海の等身大の人形のように、びくりとも動かない。

それを見て、雫は彼の手の手を伸ばす。

「海。動いても平気よ。暴れたりしない限り、そんなに揺れないよ
うになっていますから」

「……本当？」

涙目になり、普段は決して見せない怯えた表情を雫に向ける海。
雫はそれを見て、海のことを思い切り抱きしめなくなった。

（可愛い……！本当に可愛いわ！）

両頬に手を添え、目を輝かせる雫。

彼女もまた、親馬鹿の一人だった。

そのまま欲望に身を任せ海を抱きしめたかったが、そうすると海
が嫌がるのを彼女はわかっていた。

だから彼女は自重する。そこが輝との違いだった。

海にアルカイクスマイルを向け、改めて手を差し出す。

「ええ。これはね、『観覧車』って言って、ゆっくりと外を眺める
乗り物なの。だから、激しく揺れるようには出来てないのよ。それ
でも不安なら、私と手を繋いでいましょう」

「……うん」

海は素直に頷いた。

いろいろな葛藤よりも恐怖が上回ったのだ。

ぎゅっと、強く雫の手を握る海。

その姿に、雫は一人、胸中で悶えた。

にこにこ幸せそうな笑顔を浮かべる雫。

むろん、それを目の前で見せつけられ、黙っている輝ではない。

「二人ともずるい！僕も——」

腰を浮かせ、海達の方へ（この観覧車の椅子は、入口のところだけ開いたC字型の椅子になっている）向かおうとする。が——

「立つな！動くな！馬鹿かお前は！？」

海の三段突っ込みが炸裂し、輝は元の席で膝を抱える。

雫はその姿を見て、やはり笑っていた。

「海。外を見てみて」

「……なんで？」

雫の言葉に、海は眉を寄せる。

雫の手を握り、多少恐怖を抑えているとはいえ、今も高さで揺れによる恐怖は健在だ。

出来ることなら俯き、一つの恐怖をなくしたいと、海は考えていた。

雫は微笑む。

「見せてあげたいの。あなたに、広い世界を」
「え……？」

雫の言葉。

それは昨夜、彼女が言っていた言葉だった。

世界は広い。

嫌なところは、世界の一面でしかない。

彼女は確かにそう、言った。

そして、いつかわかる日がくると。そうも彼女は言った。

海は確かめたかった。

雫が言っていた言葉の真偽を。

空いている方の手をぎゅっと強く握り、同様に目を閉じてから、彼はゆっくりと目を開き、顔をあげた。

「――」

そこは、海の知らない世界だった。

頂上付近まで登った観覧車。

高さが日本一と謳われているその頂上から見る世界を、遮るものは何一つなく。

夕日に照らされ、紅い化粧を施した家にビル。それに海に空。

広い世界。美しい世界。そして、どこか優しい世界。

海の瞳に涙が浮かぶ。

雫の言葉が正しかったことを、自分の目で、しっかりと見たから。

（本当に、世界は広がった……。それに、嫌な世界は、本当に一面でしかなかった……）

この一週間を、そして今日を。

改めて振り返って、海はついに認めた。

彼らと一緒にの世界は、優しく暖かいものだ。

二人に笑顔を向けられて、安心したのがそのいい証拠だ。

安らげる世界。落ち着ける世界。

海が意識しない間に、彼はその世界の一員となっていたのだ。

――だが。

（怖い……！怖いよ！）

初めて出会った優しい世界。
海はそれに恐怖を覚えた。

この世界だけを知っていたならいい。そうすれば怯えるものなど
何一つない。

だが、海は、もう一つの世界を。
長年続けた、暗く冷たい世界を知っていた。

（もう、嫌だ……！あの世界には戻りたくない……！）

新しい、美しく穏やかな世界を知った海は、元の世界に戻ることに過剰な恐怖を感じた。

それはそうだろう。

誰だって、辛い世界より幸せな世界の方がいいに決まっているのだから。

（本当にこいつらは裏切らない……？この暖かい世界と一緒にいてくれるのか……？）

裏切りに暴力。

常にそれらに囲まれていた海は、人を信じることが出来ない。
どんなに信じたいと思っても、本能に刻まれた経験が常に警鐘を鳴らし続ける。

海は今日まで、輝達のことを『信じてみたい』と思ったことは何度かあった。

その度に警鐘に従い保留にしてきたが、今回彼は『信じたい』と思ってしまった。

言葉にすれば些細な違いだが、海の中では全く異なる意味合いを持つ。

『信じてみたい』と彼が思った人物は、かつて何人かいた。

それは初めて引き取られた時の家族に対してだったり、優しくしてくれた人に対してだったり。

……その全てに、海は裏切られてきた。

その度に心に傷を負ってきた。

もう誰も信じないと、その度に思った。

しかし人間は、『一人』というものに弱い。
いつも誰かに心の拠り所を探している。

しかも海はまだ七歳だ。

誰かに支えを求めるのは当然といえた。

信じてみたい。だから信じる。そして裏切られる。

その負のスパイラルを繰り返してきた海は、いつしか、『信じてみたい』と思うことは、『信じないための予防線』になっていた。

信じてみたいと思う度に、裏切られるから信じるな、そう自分に言い聞かせるようになっていた。

実際、輝達に引き取られた時もそうだった。

そんな海が、今、初めて強く願った。

この二人を『信じたい』と。

そこに予防線はない。心からの願いなのだから。

——だが。

（もし……もし、この二人に裏切られたら、また……あの世界に戻るようになる……）

皮肉にも、新しい世界を知ってしまったことが、海に壮絶な恐怖を与えることになった。

（信じたい……信じたい！……でも……でも……でも……！）

次第に壊れていく海。

そんな海に、雫も輝も声をかけることが出来なかった。

この葛藤だけは、自分で解決しないとどうにもならない問題だか

ら。

信じて。

この場でそう言えば、確かに海は彼らを信じることになっただろう。

が、それは果たして本当に彼の意思なのだろうか？

答えは、否だ。

追い詰められて、与えられた答えに飛びつくことに本人の意思はない。

ただ楽になりたいが故の『逃げ』だ。

それを悪く言うつもりはないが、輝達は海にそうなってほしくはなかった。

どんなに苦しくても、自分で答えを出し、それに身を任せる強さを持ってほしかった。

ぴたりと止まった観覧車内の会話。

自分の世界にこもってしまった海。

そんな海のことを、『親』として優しく見つめる輝と雪。

海は気づかない。その視線に。

だから気づけない。自分が感じている恐怖が、ただの『妄想』で
しかないことに。

初めての観覧車。

初めて知った広い世界。

しかし海は、それをもう、楽しむことは出来なかった。

「海。今日のご飯はなにがいい？」

「……なんでも、いい」

「そう？好きなものを言っているのよ？」

「……うん。ありが、とう……」

決して視線を合わせようとしない海の返事に、雫は顔をしかめる。

——遊園地に行ってから、海は変わった。

常に雫達の顔色を窺うようになり、自分の意見も言わなくなつて、あの軽快な毒舌もなりを潜めてしまった。

海は、雫達に合わせるようになったのだ。

その変化を、雫は『いい』とは思っていなかった。

自分を殺し、相手に合わせる生き方。それは、決して幸せなんかじゃない。

こうなつた理由はわかっている。

おそらく、海は恐れているのだ。

あの日、海は新しい世界を知った。

今までの辛く、暗い世界とは正反対の、暖かく柔らかい世界。
この世界を失うことを、海は恐れている。

極論でいえば、海がこうなったのは雫達のせいだ。
雫達が世界の異なる一面を見せなければ、海はこうはならなかっただろう。

しかし、彼女達は海に新しい世界を見せたことを後悔していない。
そうすることが海の成長に、幸せに繋がると信じているから。

だが――

（このままじゃいけないわね……）

自分達が見たかったのは、こんな海ではない。
こんな状況では、誰も、幸せになんかなれない。

海が自分で答えを出し、成長してくれるのが一番だが、今の海は
怯え、自分の殻にこもってしまっている。

とてもじゃないが、自分で答えを出すのは無理だろう。

だったらどうしたらいいか。

雫はその答えを知っていた。

……だがそれは、もしかしたら海に新しい傷を負わせてしまうかもしれない選択。

失敗すれば、今度こそ海は、未来永劫誰も信じることをしないだろう。

だが――

（それでも私は、海的笑顔が見たい。心からの笑顔を！そしてなりたい。本当の親子に！）

雫は決意をした。

今日輝が帰ってきたら心の内を話し、そして、海の殻を壊す決意を。

不安げに俯いている海。

そんな彼を、雫は強い眼差しで見つめていた。

その日の夕飯は、寿司だった。

雫が輝に連絡し、仕事の帰りに買ってきてもらったのだ。

内容は、あの日のものと全く一緒。

老舗の寿司店で、一番値段の張るものだ。

以前は感動のあまり箸が止まらなかった海だが、今日は違った。
一々雫達の反応を窺うようにして食べていく。

彼女達が「おいしい？」と聞けば頷き、「もっと食べれば？」と言われれば箸を伸ばす。

そうやって海は、雫達に合わせて食事をしていた。

怖かったから。

今、この二人に捨てられて、元の世界に戻ってしまうのが。

だから海は遊園地に行ってからこの一週間、彼らに合わせることに
だけに神経を費やしてきた。

捨てられないように。裏切られないように。

彼らが望む自分で居続けた。

……つもりだった。

「……海」

輝の呼びかけに、海はビクリと肩を震わせる。

彼のその声は、今まで聞いたことのない、真剣なものだったから。

なにかしただろうか？

機嫌を損ねてしまっただろうか？

そんな不安にかられながら、海はゆっくりと顔をあげる。

「……なに？」

視線は合わせない。

彼の、彼らの目を見るのが怖いから。

そんな海に、輝は言う。

「楽しいかい？」

「え……？」

一言。

たったその一言が、妙に、海の胸をざわつかせた。

「人の顔色を窺って、人に合わせて。そんな風に生きて、君は今、楽しいかい？」

「……」

彼らは自分のことをよく見てくれている。そんな彼らだから、自分の心中など、簡単に見抜いてしまう。

……それでも海は、認めるわけにはいかなかった。

笑顔を、ひどく歪な（本人は自然だと思っている）笑顔を浮かべ、海は言う。

「なに……言ってるの？僕は人に合わせてなんか……」

「海の一人称は『俺』じゃなかったかな？」

「——っ!？」

輝に指摘され、海は初めて気づいた。自分の呼び方が変わっていたことに。

それは無意識の行動。

輝達に少しでもいい印象を持つてもらおうと、無意識に考え実行していた、自分を、新しい世界を守るための行動^{ルール}。

ア然としている海。

輝は自らの席を立ち、海の側まで歩み寄り、その場に膝をついて彼の手を取る。

「海。僕達は君に、自由に生きてほしいんだよ」
「……」

輝に手を取られ、海はビクリと肩を震わせた。
そして自分の目と同じ高さにあった輝の瞳に、不覚にも目を止めてしまう。

「怖くなんかない。僕達は君を決して裏切らない。だから、人に合
わせず、自分の好きに生きてほしいんだ」

——この一週間。海はそのことを自問自答してきた。

この二人は裏切らないだろうか？
本当に信じてもいいのだろうか？

そう、何度も自分に問い続けた。

……しかし答えは出ず。

信じたいけど、でも……。

いつもそこで考えが止まってしまふ。

今だってそうだ。輝に言われて、頭の中で自問自答を繰り返す。

（信じたい。でも……。この二人は今までの大人とは違う。けど……！）

支離滅裂な思考は、海の混乱と精神的ストレスの表れだった。

二歳の時に両親に先立たれ、親戚中を、虐待を受けながらたらい回しにされ。

そうして自分の人生に絶望した海。

しかし。絶望し、自分の境遇を受け入れたからといって、ストレスが溜まらなかったわけではない。

そうやって溜まり続けたストレスが、希望と不安が入り混じり、

不安定になった海が精神が――

「僕達は、もう家族なんだから」

――ついに、爆発した。

握られていた輝の手を思い切り振り払い、海は輝を、七歳児がするとは到底思えない冷たく鋭い目で睨む。

「……ふざけるなよ……！なにが家族だ！なにが自由に生きるだ！そうやって言って、どうせお前らも俺を裏切るんだ！」

「海……」

「血が繋がってないんだ！俺達はただの他人なんだ！あんたらにとつて俺は邪魔者でしかないんだよ！」

「海。いい加減にしなさい。私達は、本当にあなたのことを息子だと思っているのよ」

雫の声。

それは墮天使でも、般若でも、魔王でもない、純粋な怒りの声。

今まで雫は、一度も海を怒らなかった。

どんなに汚い言葉を使っても、どんなに冷めた態度をとっても。

その雫が、今、明確な怒りの表情と声を海に向けている。

そのことに、海は少し怯む。

が、長年に渡って溜まり続けたストレスは、止まることはなかつ

た。

視線を輝から奪へ。
鋭い視線。

しかし雫はその視線から目を逸らすことはなかった。

海は叫ぶ。

「口ではなんとも言えるんだよ！そうだよ！結局お前らも口だけなんだ！！」

「そんなことはないわ。私達は……」

「信じられるか！信じてたまるかっ！！」

「——っ！海！」

海は椅子から飛び降り、リビングを飛び出し玄関へ。

スニーカーに足をねじ込み、そのまま玄関から外へと走る。

夜の街を、全力で走る。

頬を撫でる夜風は、とても冷たくて。

行くあてなど、あるわけがない。彼は一人なのだから。

ただ、あの空間にあれ以上居たくなってなくて逃げ出したただけだ。

「はあ……はあ……」

混乱し、働かない頭ではペース配分など出来るわけもなく。
海の心臓は、早くも悲鳴をあげ始める。

それでも、海は止まらなかった。

止まるのが、怖かったから。

二人に追いかけてきても怖いし、追いかけてこなくても、怖い。
い。

だから海はひたすら走った。

走って、走って、走って。

息は切れ、心臓は「もう止まれ」と命令を下す。

速度も歩くような速さに変わり、足も引きずって。

それでも、海は止まらない。

一步、一步。前へ、前へ。

霞む目。混乱し続ける頭。狭い視野。

その全ての要因が重なり、海は気づかなかった。

前方の十字路に、左から明かりが『近づいてくる』ことに。

飛び出した十字路。それと同時に響く、甲高いブレーキ音。

体を明るいい光りが包んだところで、海は初めて気づいた。

自分に迫ってくる、一台の車に。

虚ろな視線を車に向けながら、海は、自分はここで死ぬんだと悟った。

（ろくな人生じゃなかった。そんな俺には、こんな幕切れがふさわしいのかもな……）

自分のこれまでの人生を、海は振り返る。

……だが、浮かんでくるのは輝と雫、二人と過ごした日々だけで。

彼らと過ごしたのは、わずか二週間程度。

海がこれまで生きてきた七年間の中で、唯一思い出せるのがその二週間だけで。

海は小さな笑みを浮かべる。

（……そうか。やっぱり俺は、あいつらと過ごすのが楽しかったんだな……。幸せ、だったのかも……。）

最後の瞬間にそれを知れてよかった。

海はそう思い、笑顔を浮かべたまま目を、閉じた。

近づくブレーキ音にライトの光。

——そうして、海の体を浮遊感が包んだ。

思っていたものとは違う軽い衝撃と、暖かい温もりと共に。

「はあ……はあ……はあ……！」

地面を転がったはずなのに、全く痛くない体。そして自分を包む

暖かい温もり。

海は知っていた。

耳元で繰り返される荒い息の持ち主を。この体温の持ち主を。

だが、あり得ないとも思った。

ここにいるわけがないと。自分の命を危険にさらしてまで、自分のことを助けるわけがないと。

おそろおそろ、海は目を開く。

……そこにいたのは、海の、想像通りの人物だった。

海のことを上にして、地面に横たわっている輝。

地面を転がった時に石で切ったのか、シャツの右の袖が切れ肌にも傷を作り。

荒い息を繰り返しながらも、彼は優しい瞳を海に向けていた。

「はあ……大丈夫かい、海？」

「え……？あ……」

走り去る車のドライバーからの怒声を無視し、輝は海に笑いかける。

海はそれが信じられなかった。

「……なんで？」
「うん？」

笑顔を崩さない輝。

その笑顔に、海の感情が爆発する。

「なんでお前はこんなことが出来るんだよ！？死んでたかもしれないんだぞ！！」

輝の上で、彼に抱きしめられながら海はほえる。

海の瞳には大粒の涙が浮かんでいて。

海が本気で自分のことを心配してくれていることを悟り、輝は嬉しくなった。

海の頭を優しく撫でながら、輝は言う。

「気づいたら体が動いてたんだよ。海のことを助けたい、そのことしか考えてなかった。それに」

輝は、海の体を思い切り抱きしめた。

今、海に必要なのは、人の温もりだと思ったから。

「それに、息子を守るのに理由が必要かい？」

「——っ！」

海が息をのんだのを聞いてから、輝は彼の頭を優しく撫でる。

「さっきの続きだけどね、僕の言葉を、僕達のことを信じるかどうかは、海がこの先見定めて決めればいい。だからね、焦らないでほしいんだ」

「……」

「焦って、自分を殺して、人に合わせるような生き方はしてほしくないんだ。僕達はそんなこと、望んでいない」

海は言葉を発せず、輝の言葉を真剣に聞く。

彼の言葉の一字一句を逃さないように。

「時間がかかったって構わない。いくら時間がかかって、僕達は海のことを見捨てない。一人になんかしない」

「……俺は一人だ。あんた達と血だって繋がっていない……」
「そんなこと関係ないんだよ」

輝はそこで海の体を持ち上げ、自分と目線を合わせる。

強い意志の込められた輝の瞳に、海は目が逸らせなくなった。

「血が繋がっていなかったって、家族になれる。僕達が海を息子と認め、海が僕達のことを親と認めてくれれば、それでもう、僕達は親子で家族なんだよ」

真剣な瞳。

真剣な表情で告げられた輝の言葉に、海の胸は暖くなり、瞳にさらに涙が浮かぶ。

「もう我慢しなくていい。言いたいことは言えればいいし、やりたいことはやればいい。良いことをすれば僕達は褒めるし、悪いことをすれば怒る。普通の親子みたいだね」

「——っ！」

海の瞳からは、もう、涙がこぼれていた。

止めようとするのに止まる気配はなく、それどころかさらに勢いを増して。

そんな息子のことを、輝は優しく、しかし強く、抱きしめる。

「海は、もう一人なんかじゃない。一人になんかせせない。僕達がいる。ずっと、側に」

「……う……う……」

海の頭を撫でる輝の顔に、優しい笑顔が浮かぶ。

それは、紛れもない『父親』の笑顔だった。

「大好きだぞ。海」

「——っ！あぁ……あぁーっ！」

『好き』それは人に愛情を伝える言葉。

それは人に認められたのを教えてくれる言葉。

（……ずっと、俺は誰かに『好き』って言ってほしかったんだ……）

輝にそう言われて、海は初めて自分がそう思っていたことに気がついた。

（邪魔でお荷物。なにも出来ない厄介者のガキ。俺はずっとそう言われてきた。俺自身、自分のことをそう思っていた……）

人間は、特に、『自分』というものをしっかり持っていない子供は、暗示にかかりやすい。

いや、この場合は洗脳というべきか。

毎日、毎日。

お前は厄介者だ。いらない子だ。などと言われていれば、いつしかその子は自分のことをそう思うようになる。

自分はいらない存在だと。生きていても仕方のない存在なんだと。

海がまさしくそうだった。

他人を信じてでも裏切られる。

自分はいらない存在だ。

そんな自分に、明るい未来なんて待っていない。

そうやって、海は自分の人生に絶望した。

だけど……

（今、こいつに好きって言われて、すごく、嬉しかった……。生き

ていていいんだって、必要としているって。そう言われたみたいで……)

ないと思っていた未来。

いらなかった自分。

それら全てが虚像だったと、ただの思い込みであつたと教えてくれた人の胸で、海は泣き続けた。

とても、とても嬉しかったから。

涙はとめどなく流れ。口は意味を成さない声をあげ続ける。

それらを全てを包み、受け入れる輝。

(泣けるだけ泣いてしまえばいい。今まで我慢してきた分、全て)

胸の中で泣きじゃくる息子を抱きしめながら、輝は空を見上げていた。

澄み渡った空。

そこには、星が柔らかく輝いていた。

「ん……？」

朝、目を覚ました海は、いつもとなにかが違つことに気がついた。

「……明るい……？」

窓から差し込む光。

それは朝の訪れを告げる暖かな光だが、海にとって、それが異常だった。

彼の目覚めは、いつも闇の中だった。

日の出前に自己防衛のために自然と目を覚ますのだ。

だからこそ異常だった。

太陽の訪れたあとに目を覚ましたことが。

それに……。

「誰も……いない……」

寝ていた布団の左右を見ると、そこには誰の姿もなく。

いつもなら起きれば横にいる（いつも近藤家で一番早く目を覚ますのは海だった）二人の姿見えず、海は不安に襲われた。

慌ててベッドから飛び降り、スリッパも履かず二人の姿を探しに走る。

廊下に飛び出して左右に首を振るが、誰の姿も見えず。

海は胸に生まれた不安に突き動かされ、海は足を動かす。

ドタドタと走る海の足音とは別の音がリビングから漏れ聞こえてくるのを聞いた海は、勢いよく、リビングの扉を開けた。

「おや、海おはよう。今日はお寝坊だね」

「おはよう海。どうしたの？そんなに慌てて？」

そこで海は、探していた人物達に優しい笑顔で迎えられた。

求めていた二人が、今までの人達のように自分を置いていなくならなかったことに安心した海。

安堵し落ち着きを取り戻した彼は、ことの次第を理解した。

太陽がおはようと言っているのは、自分がいつもより遅く起きたから。

二人がいなかったのは、こうして朝の支度をしていたから。

海は目をつぶり、頭の後ろをカリカリとかく。

（考えてみれば当然のことだろうが。なんでそんな簡単なことに……。いや、それだけこの二人の存在が大きいってことか）

海は昨日のことを思い出す。

昨日、泣き止んだ海は、輝に手を引かれて家へと帰った。

道中、会話らしい会話はなかったが、そこには確かに穏やかな時間流れでいて。

家へ着いた海を出迎えたのは雫の抱擁だった。

海の隣にいた輝を突き飛ばし海を抱きしめたのは、ある意味お約束と言えよう。

そんな雫だが、夫が怪我を負っているの見逃すほど愚かではな

い。

輝に怪我を負った理由を問い、それを知った雫は海の頬を叩いた。

突然のことに反応出来ない海に輝。

そんな二人を置き去りにして、雫は瞳に涙を浮かべて海のことを抱きしめた。

そして言う。

もう二度とそんな危ないことをしないで、と。

雫は、心から恐怖を感じていた。海を失っていたかもしれないことに。

そして、同時に心から安堵していた。

海が、今、目の前にいてくれることに。

海はそれがわかった。

だから彼は、雫に謝りながら再び涙を流した。

自分のことを心配してくれる人が出来たから。

自分のために涙を流してくれる人がいたから。

海は嬉しくて泣いた。自分を受け入れてくれた人の温かい胸で泣き続けた。

そのまま海は泣き疲れて、雫の胸で眠ってしまったのだ。

——そうして向かえた朝。

昨日までと変わりなく自分のことを迎えてくれる二人に、海の胸はとても暖かくなった。

嬉しい気持ち。暖かい気持ち。

こんな気持ちがあることを教えてくれた二人に、自分は一人じゃないと教えてくれた二人に、海はなにかしたかった。少しでもありがとうを返したかった。

今まで下心がある人間達に囲まれて生きてきた海は、人の心に敏感だ。

だからわかる。二人に下心なんてものがないことに。

恐怖や絶望に目が曇っていたころにはわからなかったが、今ならわかる。

二人は恩返しがしてほしくて自分のことを引き取ったのではない。恩を返すようなことを二人は望んでいない、と。

それはわかっている。

わかつてはいるが、それでも、海はなにかをしたかった。

今の自分はなに持っていない。なにも返せない。それもわかっている。

でも、唯一、言葉は持っている。

そして敏感すぎる彼の『目』は、雫達が望んでいる唯一のことをあっさり見抜く。

正直に言ってそれはとても簡単で、しかし、海にとってはひどく難しいことで。

けど、海はそれを『言う』ことを強く望んだ。

自分を受け入れてくれたこの二人と、『家族』になりたいと強く願った。

だから――。

海は小さな拳を握り締め、俯き、視線を左右に揺らしてから、覗き込むように雫へと顔を向ける。

そして、羞恥に染まる顔に自然と浮かんだ笑顔を乗せ、口を開く。

「……お、おはよう。………か………母さん」

——突然だが、雫はそれほど運動が得意ではない。

そして海がリビングに入った時には、彼女はカウンターキッチンの向こう側でコーヒーを入れていた。

ついでに言うなら、リビングの入り口からキッチンまでは、数メートルの距離がある。

それなのに。それなのに、海が『母さん』と言ったその瞬間に、雫は海のことを思い切り強く抱きしめていた。

雫の、決して小さくない胸に顔を押しつけられ、海は恥ずかしさから固まった。

そんな海のことを完全に無視し、雫は満面の笑みを浮かべて輝に顔を向ける。

「輝さん！聞きましたか！？今、海が『母さん』って！」「ずるい！！！」

輝は読んでいた新聞を投げ捨て、海の元に走り寄る。

そして、雫の胸で固まる海の肩をつかみ、無理矢理雫から引き離し自分の方へと体ごと向けさせた。

この時、雫がとても不機嫌そうな、具体的にいえば『大魔王』の顔をしていたのだが、輝は運よく（運悪く？）そのことには気づかなかった。

真剣な眼差しを海に向け、心の底から叫ぶ。

「海！僕は！？僕のこととは！？」

「え、あ……」

むろん海は、輝のことも『父』と呼ぶつもりでいた。いたが、過剰な反応を見せる二人に、海の羞恥心が刺激され。

それに、この距離が悪かった。

雫の時のように離れていれば、彼も素直に輝のことを『父』と呼べていたのだが、こんな間近でそう呼ぶのは、あまりにも恥ずかしかった。

「さあ！海！僕のことを『父さん』と呼んでごらん！もしくは『パパ』でもいいよ！！さあ遠慮せずに言ってみたまえ！My Son
！！」

さらにいうなら、輝のこのしつこさもいけなかった。

なぜならこれは、海の羞恥心をあおる結果にしかないのだから。

「さあ、海！」

嬉しそうな笑顔を輝に向けられて、海の恥ずかしさは、ついに限界を超えた。

「うるさいんだよ！この馬鹿『親父』っ！！」

顔を真っ赤にさせ、輝を睨みつけ叫ぶ海。

そんな海の言葉に、輝はショックを隠しきれなかった。

海の肩から手を離し、大袈裟なくらいによろめく。

「お……親父……？」

親父。それは、確かに父のことを指す代名詞だ。

しかし、それは輝が望んだ呼び名ではなかった。

輝は瞳に涙を浮かべ、海の肩を再度つかみ、前後に激しく揺らす。

「なげだい！？なぜ雫は『母さん』で、僕は『親父』なんだい！？不公平じゃないか！そういうものは、きちんと平等に扱わなきゃいけないんだぞ！！」
「やかましいっ！子供かお前は！」

海が発したその言葉は、奇しくも雫が思ったことと全く一緒だった。

「海ー。お願いだから僕のこと『父さん』と呼んでおくれよー」
「気色の悪い声を出すな！お前なんか親父で充分だ！それにいい加減離せ！酔うだろ！」
「かーいー……」
「いい大人が泣くなー！って、あ、やばい……本当に気持ち悪くなってきた……。か、母さん……助けて……」
「おい。手を離せ」
「了解しましたーっ！！」

海が雫に助けを求めた瞬間、雫は輝の胸倉をつかみドスの効いた声と凍てつく眼差しで輝を睨みつける。

それを向けられた輝は、『生命』の危機を本気で感じ、海から大幅に距離を取る。

（今の……なに！？大魔王の、さらに上がった……！？）

今まで見たこともない表情。

今まで聞いたことのない声。

今まで感じたことのないオーラ。

今まで見たことがないくらいの怒りを浮かべていた雫。
それは全て、海のためで。

輝は苦笑いを浮かべる。

(……やれやれ。やっぱり雫だって、充分親馬鹿じゃないか)

今見たものが目の錯覚なんではないかと思うくらい、全く別の、
柔らかな笑顔を浮かべて海を抱きしめている雫。

そんな彼女を見て、輝は肩をすくめた。

「海。大丈夫だった？」

「うん。ありがとう。えと……母さん」

「……」

「海……！もう一回呼んで！」

「え……？あ……か、母さん……」

「海！」

「……………」

「うわ！母さん苦しいよ！」

「だって海が可愛すぎるんだもの！それに、今までずっと、抱きしめるのを我慢してきたんですもの！もう我慢しないわよ！」

「……………」

「それとも抱きしめられるの嫌かしら？」

「そんなこと……ないよ。母さん、いい匂いするし……」

「——っ！海っ！」

「わあ！だから苦しいって……」

「やっぱりずるいー！」

二人の触れ合いを目の前で見せつけられていた（二人は別に見せていたつもりはない）輝の堪忍袋の尾が、ついに切れた。

涙目で、雫ごと海を抱きしめる輝。

それに対して恥ずかしさから叫ぶ海。

そんな二人を、優しく見つめる雫。

それは間違いなく、一つの家族の姿。一つの親子の形。

長い、長い旅をして、海はようやく手に入れた。

ずっと、ずっと欲しかったものを。

海が望んでいたものは、決して特別なものではない。

それはありふれたもの。

一緒に過ごしてくれる家族。

自分のことを、一人の人間として扱ってくれる両親。

それだけ。

誰しもが、とは言わないが、持っていて当たり前のもの。

それを海は求め続けた。

長い、長い間。

そうして、ようやく。

ようやく彼は手に入れた。

大切な、大切な家族を。

以前、雫と一緒に工藤に食事に行き、圭に名前を聞かれた時、海は名前だけを答えた。

だけど、今の彼なら、間違いなくこう名乗るだろう。

近藤海と。

それは、梅雨入り直前の、よく晴れた六月最初の日曜日。

『あの日』から一週間が経ち、海が輝達を父母と呼ぶことにも慣れ、日常生活にも自然と笑顔を浮かべるようになったそんな日の、朝のことだった。

食卓に座り、いつものように三人でとる朝食。

食卓に並ぶのは、食パンに数種類のジャム。それに簡単なサラダといった、近藤家では定番となっているメニューだ。

しかし、それを前にした海の表情は優れなかった。

別にメニューに不満があるわけではない。

時に、ゴミを漁ってまで飢えをしのいできた海にとって、これは充分なご馳走だ。

飽きたわけでもない。

商店街で人気のパン屋の食パンはとても美味しく、塗るジャムを変えればいろいろな表情で海を楽しませる。

今、海の顔が優れないのは、ある意味、『家族』としてのわがままからだった。

「海、どうしたんだい？食が進んでいないみたいだけど……」

海の正面に座った輝が、息子の変化に気づく。

「海？どこか具合でも悪いの？」

輝に先を越された悔しさを押し殺して、雫は海に問う。
ここで言い争っても、なんの意味もないと理解しているからだ。

二人の優しさに感謝と、心配をかけたことに罪悪感を覚えながら、
海は自分のわがまを伝えることにした。

窺うような上目目線で、雫のことを見ながら口を開く。

「あの、さ……。お願いがあるんだけど……言ってもいい、かな……？」

「ええ！もちろん！」

息子のお願いに、雫は笑顔で頷く。

息子に頼られたことが、なによりも嬉しかったのだ。

……海の次の言葉を聞くまでは。

「あのさ……俺……母さんの手料理が食べたいんだけど……」

海がこの家に来て、早一ヶ月。その間、雫が料理を作っているところを、海は見たことがなかった。

せいぜいトーストを焼いたり、出来合いの料理を盛りつけたり。コーヒーを入れたりしていたくらいだ。

海のこれまでの境遇を考えれば容易に想像出来ることだが、彼はこれまで、誰かの手料理なんて食べたことがない。

だから懂れたのだ。親の、母の作る料理に。

そんな思いから出た願望。

それに対し輝は「え」と声をあげ、持っていた食パンが手を滑りテーブルへと落ち。

一方の雫は……笑顔で固まっ

訪れた不穏な空気を敏感に感じ取り、海は俯く。

……この時、海は勘違いをしていた。不穏な空気は海の申し出が

嫌だったからでは、決してないのだ。

だが、人の悪意には敏感で好意には鈍い海はそのことに気づけない。

……それが、『悲劇』の始まりだった。

「やっぱり……嫌……かな……？」

息子の悲しげな声と表情に、雫は慌てて首を横に振る。

「そんなことないわ！わかりました！じゃあ、昼ご飯は私が作りま
す！」

「ちよっ……！？まっ……」

「そうと決まれば善は急げ、よ！私、今から買い物に行つてきます。
輝さん。申し訳ありませんが、朝食の片付けをお願いします」

「し、雫……っ！？」

輝の制止も聞かず、雫はそう言つて嵐のように家を飛び出した。

それを海は呆然と見送つていた。

なにが起きたのか、理解出来なかったのだ。

雫を止めようと、椅子から腰を浮かし手を伸ばしていた輝が『絶

望』の表情で再び椅子に座ったのを見て、海はおそろおそろ彼に声をかける。

「お、親父……？」

輝は、顔を天に向け。目を右手で覆いながら応える。

「海……。君は、知らなかったとはいえ核弾頭のスイッチを押してしまった……」

核弾頭、という単語の意味を海は知らなかったが、それがなんだかやばそうなものだということは、輝の態度から理解出来た。

海は息をのむ。

「僕は今から、海でも飲めるような胃薬、下痢止め薬、頭痛薬、吐き気止め薬を用意する。けど、最後に物を言うのは精神力だ。……自分を強く持てよ、海……」

海が、今更ながら、自分の行動を後悔したのは、言うまでもない。

——そこは戦場だった。

むろん、銃声やら人の死体などで埋もれているわけではもちろんない。

場所は近藤家のキッチン。

そこで動いているのは、近藤雫ただ一人。

だが、キッチンの入口から中を覗いている海には、そこが戦場（むろん実際の戦場など見たこともないのだが）に見えてしかたなかった。

なぜかはわからないが、『あちこち』からあがっている煙。

どこからかはわからないが、ゴミを漁った経験のある海ですら鼻を摘みたくなる悪臭が漂い。

フライパンを振るえば火があがり、鍋を火にかければ必ず吹きこぼし。

「痛っ……」

そうして雫の指には無数の切り傷が出来ていた。

……現在進行形で、今も、なお。

「し、雫……。やっぱり諦めた方が……」

雫の手当をしながら、輝は優しく、しかし窺うように声をかける。そんな彼の顔は、いろいろな意味で真っ青だった。

「なにを言ってるんですか！海が私の料理を食べたいって言うてくれたんです！なら選択肢は一つしかないじゃないですか！」

「いやしかし……人には向き不向きが……」

「そんなもの、息子への愛で乗り越えてみせます！」

そう言つて、再び火を出し悲鳴をあげる雫を見て、輝は天を仰ぎ目を覆った。

（雫……。君の海への愛は認めるけど、愛だけじゃどうにも出来ないこともあるんだよ……）

嘆く輝は、ふと視線を感じ、キッチンの入口へと顔を向ける。

そこにいた心配そうな海を見て、輝は苦笑を浮かべて首を横に振る。

雫を止められない、という意味と、昼食は諦めるしかない、という意味の二つを込めて。

海はそんな輝を見て、悲鳴をあげながら料理（？）をしている雲を見て。

そして、出てくるであろう料理を想像して。

彼は決意した。ある、一つのことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3357s/>

空に想いを...

2012年1月10日02時53分発行